

# 正しい批判はいかにあるべきか（七）

——教条主義批判を装った修正主義——

山本二三丸

	ま	え	が	き
第一節	予備的注意			
第二節	榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その一）	……	……	（以上、本誌第二十一卷第一号所載）
第三節	榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その二）	……	……	（以上、本誌第二十一卷第二号所載）
第四節	榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その三）	……	……	（以上、本誌第二十一卷第三号所載）
第五節	榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その四）	……	……	（以上、本誌第二十一卷第四号所載）
第六節	榊氏による修正主義批判（その一）	……	……	（以上、本誌第二十二卷第一号所載）
第七節	榊氏による修正主義批判（その二）	……	……	（以上、本誌第二十二卷第三号所載）
第八節	榊氏による修正主義批判（その三）	……	……	（以上、本誌第二十二卷第一号所載）
第九節	榊氏による修正主義批判（その四）	……	……	（以上、本誌第二十二卷第三号所載）
第十節	榊氏の「教条主義批判」の客観的意義			

むすび

正しい批判はいかにあるべきか

## 第八節 榊氏による修正主義批判（その三）

## 一

雑誌「前衛」第一九二号（一九六二年一月）に発表された榊利夫氏の画期的論文、『共産主義の壮大な展望——ソ連共産党二二回大会と新綱領にみる』は、つぎのような見出しをつけた八節から成っているが、これらの見出しを一読しただけで、この大論文が「ソ連共産党第二二回大会と新綱領」にたいする絶対的な支持と熱烈な賞讃、その献身的な宣伝を表明するためのものだということはすぐわかる、——曰く、「共産主義建設の綱領」、「あふれるような工農業生産物」、「展望に挑戦する国外反動勢力」、「所得は三倍半、税金は全廃」、「高まる福祉、無料使用の分野がひろまる」、「働くことが切実な要求に」、「社会主義的民主主義の発揚」、「マルクス・レーニン主義に導かれて」（ゴシツク体——榊氏、傍点——山本）。第二二回大会にしたしく出席した榊氏が、いちはやく発表した報告論文、『ソ連共産党第二二回大会から』のなかで、ことさら、「新綱領について、22回党大会のすべについて、まだまだ書きたいこと、書かねばならないことはたくさんある。しかし、紙数の制限があるためこれ以上かけない」と「ことわりがき」をつけていることはさきに見たとおりであるが、ではその直後に雑誌「前衛」に発表された本格的な大論文において右の「山ほどある書きたいこと、書かねばならないこと」がすこしでも書かれているかとおもえば、とんでもない、あたらしいことはなにひとつ書かれていない。さきの論文もあとの論文も、その内容はまったく同じものであって、ただ、あとの論文は、さきの論文で書きたてたフルシチョフ礼讃、フルシチョフ路線の支持と宣伝を、さらにいちだんと強調し、「本格的」体裁をこらしたという点でずばぬけているところがちがうだけである。それゆえ、さきの「ことわりがき」は、善意の読者をまん

まど感心させる榊氏の常套手段、つまり、根も葉もない嘘っぱちの飾り文句にすぎないか、それとも嘘っぱちのだけ、  
らでないとするれば、客観的には、つぎのような事実を指しているものとしてのみ、意味をもちうる。それは、榊氏に  
とって「まだまだ書きたいこと、書かねばならないこと」というのは、あとの論文がみごとに立証しているように、「フル  
シチョフ礼讃、フルシチョフ路線とフルシチョフ新綱領の支持と宣伝」をばも、つと、つと強力的に、徹底的に、宣明す  
ることであり、そしてこの精力的な「教祖への猷身的な帰依、忠誠および宣伝の展開」という事績によって、ぜひと  
も、「教祖にもっとも近い、権威ある最高の弟子」の地位がわが榊氏に保証されなければならないということ、これ  
である。そして、榊氏がみごとに右の「課題」と「目的」を達成していることは、氏の本格的な大論文を冷静に読む者  
にとつては、誰ひとりこれを疑うことはできないのであって、われわれも、以下、簡単にではあるが、大論文の中の  
主要論点を抜粋して、氏の精力的奮闘ぶりとその「成果」のほどを正確にとらえることにしよう。（さきの報告論文の  
内容との比較のために、また、行論で榊氏のみごとな豹変「フルシチョフ批判」の内容を検討するさいに比較吟味する便宜も考  
えて、以下では、榊氏の本格的な大論文の主要内容を、あますところなく、簡条書きにして、示すことにする。）

## 二

### (一)「フルシチョフ新綱領」の「画期的意義」の強調と讚美。

「四八〇〇名の代議員と日本共産党をはじめ八〇カ国の兄弟党代表団が参加して、一〇月一七日から三一日にかけてモスクワで  
開催されたソ連共産党第二二回定期大会は、一九五六年の第二〇回党大会いこの党と人民の活動を総括し、新指導機関の選出をお  
こなうとともに、当面のソ連邦の全生活の大綱である新綱領を採択した。歴史をひもといてみれば、そこには人びとの注目をあび  
た歴史的文献や宣言は少くない。しかし、ソ連共産党新綱領のようにいっせいに全世界から注視をあび、そして今後の歴史の発展

正しい批判はいかにあるべきか

四二

に大きな影響をあたえる全国家的な綱領はほかにあるまい。この綱領は、ロシアの労働者階級をふくむ全世界の労働者階級が百年このかたの夢み、追究していた共産主義社会の建設の道ゆきを明快にしめし、こんご二〇年間にソ連で共産主義社会の物質的・技術的基礎をつくりあげる可能性を科学的・理論的にあきらかにしている」(前出、一二〇ページ、傍点および傍線―榊氏、ゴシツク体―山本)。

ごらんのように「わが国のマルクス・レーニン主義者」榊氏の断定によれば、「フルシチョフ新綱領」の絶大な「画期的意義」は、さつとつぎのとおりである。

イ、これほど「いっせいに全世界から注視をあび」た綱領は、いまだかつてひとつもない。

ロ、これほど「今後の歴史の発展に大きな影響をあたえる」綱領はほかにまったくない。

ハ、これほど「全国家的な」綱領はほかにひとつもない。

ニ、これは、「全世界の労働者階級が百年このかたの夢み、追究していた共産主義社会の建設の道ゆき」を「明快にしめし」ているすばらしい綱領である。

ホ、これは、「こんご二〇年間に、ソ連で共産主義社会の物質的・技術的基礎をつくりあげる可能性を科学的・理論的にあきらかにしている」まったくすぐれた綱領である。

「フルシチョフ新綱領」が「明快にしめしている道ゆき」にしたがっていきなえすれば、「一九八〇年」までにソ連に「共産主義社会の物質的・技術的基礎がすかりつくりあげられる」のは絶対確実だと、わが榊氏は、太鼓判をおして保証し、このフルシチョフ創作の「新綱領」の古今未曾有の意義を懸命にふれまわっているのである!

(一) この「科学的・理論的に」という、榊氏の新造語に注意されたい。このばあい、可能性を「科学的に、あきらかにする」こととそれを「理論的にあきらかにする」こととは、まったく、どこが、どうちがうというのか? こういう用語そのもの

は、「哲学者兼評論家」と称する榊氏じしん、「科学的」と「理論的」という、二つの言葉の本来の意味を全然わきまえていないという事実を端的に示している。いや、そればかりではない。わけわからない「理論的」言葉を二つでも三つでも重ねておけば、一般の読者はその著者の「博識」に感心して必ずその言うことをきくものだという考え方、つまり「わが国のマルクス・レーニン主義者」の間においてとくに根強くはびこっている卑俗な大衆引廻し主義が、ここにも露呈されているのである。

## (二) フルシチョフ路線の献身的支持、礼讃と宣伝

「……共産主義は、なによりもまず、ありあまるほどの物質財が生産され、消費される具体的な人間の最高の社会である。……こうした社会のすばらしさは、どんな人にもたやすく理解できることである。したがって、ソ連邦における現実の共産主義建設が世界の勤労者（意識の高低にかかわらず）(?)に深刻な影響をあたえていくことは今からでも十分に予想できる。『わが国の経済の嵐のような発展は、資本主義諸国の数百万の民衆をさらに共産主義思想の側にひきつけるために、われわれがもつ最も強力な武器なのである』というフルシチョフ第一書記の指摘は、現代の共産主義運動におけるソ連のきわだった役割を象徴的にいいあらわしている」(前出、一二二ページ、傍点、ゴシック体および(?)—山本)。

ごらんのように、わが榊氏は、「なによりもまず、ありあまるほどの物質財が生産され消費される社会こそが共産主義社会」という、物欲第一・物質的利益第一のフルシチョフ主義をけんめいに支持し、「ありあまるほどの物質財が生産され消費される」という「すばらしさ」にはどんな勤労者もみな必ずひきつけられるはずだという、勤労者をすべて俗物的小ブルとみなすフルシチョフの持論をけんめいに宣伝し、「ソ連邦一国だけいちはやくありあまるほどの共産主義社会に到達することが現代の世界革命運動の最重要な課題であり、現代の共産主義運動におけるもっとも強力な武器だ」という、教祖フルシチョフの根本的思想にソ連邦共産主義社会建設最優先主義を献身的に支持し、その宣伝に大わらわである。

(三) 「世界共産主義革命運動は経済競争によって決定される」という、フルシチョフ式世界革命路線の熱烈な支持と宣伝

正しい批判はいかにあるべきか

「現代の歴史の基本的内容をなすものは、社会主義世界体制と資本主義体制とのたたかいであるが、そのなかでも経済は両体制の闘争的競争(?)のおもな戦線である」(前出、一二二ページ、傍点、ゴシック体および(?)―山本)。

#### (四) フルシチヨフの大ぶろしきⅡ「生産計画数字」のけんめいの支持と宣伝

「あふれるような工業生産物

……こんご一〇年間に工業生産高は約二倍半にふえ、二〇年間にすくなくとも六倍になる。統計資料によれば、一〇年後のソ連の工業生産物はアメリカの現水準を相当上まわっているばかりか、人口一人当りの生産高でもアメリカを抜くことになる。二〇年後の水準がアメリカをどれほど引きはなしているか、つけくわえるまでもない。

……農産物の総生産高を一〇年間に約二倍半に、二〇年間に三倍半にたかめる課題をだしている。ソ連農業は最初の一〇年間に、人口一人当りの生産高でアメリカを抜く。穀物の生産は二〇年間に二倍以上になるだろう。このばあい、提起されている課題は、いかなる気候条件のもとでも国民の食料需要を十分にみたすだけでなく、発展する工業の需要にも完全にこたえることである……………。

農業の今後の発展にかんしては、コルホーズの道をとるかソフホーズの道をとるかが問題となってくる。以前はコルホーズ的發展の道の後者に融合していく(?)との考えをもつ人が一部にあったが、新綱領は両形態をともに発展させていくとうたっている。つまり、コルホーズの・協同組合的所有をソフホーズ的・全人民的所有に早急に(?)転化させていくのではなくて、両方を発展させるなかで共産主義的(全人民的)な所有・生産・分配関係(?)を形成していくというのである」(前出、一二三―一二四ページ、ゴシック体―榭氏、傍点および(?)―山本)。

#### (五) フルシチヨフの物欲第一主義的「福祉」数字の熱烈な宣伝

「所得は三倍半、税金は全廃

ソ連邦の国民所得は、むこう一〇年間には約二倍半になり、二〇年間には約五倍になる。各人当りの実質国民所得は二〇年間に三倍半以上にふえる。労働者・事務員の実質所得(収入)は平均ほとんど二倍になり、二〇年間には三倍ないし三倍半になる。コルホーズ(集団農場)員の実質所得は平均して一〇年間に二倍以上に、二〇年間に四倍以上になる。これまでわりに賃銀の低かつ

たものは、増加率はもっとたかい。知識人の収入も、いぢるしく増大する。

日本でも「所得倍増」論が政府によって大宣伝されているが、これとソ連のそれとは内容的に月とスッポンほどのちがいがあ  
る。……ところがソ連の倍増は、文字どおりの倍増である。一方で収入（賃銀）がふえるとともに、物価も系統的にさがって  
いく。さらに税金もへり、ついには税金全廃が約束されている。……もともとソ連では、税金の額は非常にちいさく、国家予算の収  
入面で税金のしめる割合は八%弱にすぎないが、それでも税金がちかく全廃されるのは、資本主義国ではぜったいに実行できな  
い特色であり、社会主義の絶対的魅力のひとつである。<sup>(3)</sup>……

しかも新綱領は、こうした消費物資の増産を『地方、民族の条件、気候条件などを考慮して』おこなうように注意している。ま  
ったく『かゆいところに手のとどくように』、党は各人の福祉と便宜に配慮をよせているのである。現在ソ連では『すべてを人間  
のために』ということが合いことばとなっているが、これこそ党の偉大な社会主義的ヒューマニズムを具現化したことばである』<sup>(4)</sup>  
(前出、一二五—一二七ページ、傍線—榊氏、ゴシツク体は最初の一行が榊氏、その他はすべて山本、傍点—山本)。

(2) 「今後二〇年間に、頭脳労働と肉体労働との差異の根絶を実現することが、新綱領で示された重大な課題のひとつであ  
る」と、榊氏は力説強調しているが、ここで榊氏が得々として「二〇年後にも知識人という特別の人間がいる」と述べたて  
いるところからみると、「頭脳労働と肉体労働の差異の根絶」という聞えのいい言葉が、どういう意味のものかは、榊氏自身に  
とって皆目わかっていないということがわかる。この「将来知識人の収入もうんとふえる」という景気の良い文章も、もっぱ  
ら、「収入がすこぶる貧弱で税金におわれている」日本の「知識人」たちに、「フルンチョフ新綱領」のすばらしさを大いに実  
感させようとの下心からでた、いつもの政治屋的だぼらの類でしかない。

(3) 榊氏は、資本主義国での賃銀と社会主義国での「賃銀」とのあいだの本質的差異がこれっぽっちもわからず、両者の根本  
的なちがいに気がつくことすらできず、ひたすら「税金全廃」という文字を並べて、資本主義国の税金苦にあえぐ賃銀勞  
働者の「心情」に訴えようと、涙ぐましい努力をかさねているが、客観的にみれば、こういう説明は俗物にうってつけのペテ  
ン論法である。俗物的ペテン論法をつかって「税金全廃こそ、社会主義の絶対的魅力のひとつだ」とけんめいにふれまわると  
は、なんと、教祖に絶対的に忠実な「フルンシチョフ主義のセールスマン」であろうか！

(4) 物欲第一主義の亡者・典型的俗物の眼からみれば、「自分の国だけいちはやく物資があふれるようにしたてあげる」とい

正しい批判はいかにあるべきか

正しい批判はいかにあるべきか

四六

う「目論見」は、もちろん、「かゆいところに手のとどくよう」に見えることであろう。自国以外の国の数億の勤労人民を「平和的」被抑圧・被搾取状態に陥らしておいて「自分たちだけ物質的福祉をたらふく満喫しよう」という「フルシチョフら指導層」の露骨な利己的物欲第一主義が、その忠実なたいこもちの口にかかると、「党の偉大な社会主義的ヒューマニズムを具現化したものだ」と賞めそやされることになるのである！

#### (六) フルシチョフの空手形<sup>カウ</sup>「無料サービス」の大わらわの宣伝

「……しかもすべての住宅使用をしないで無料にしていく。……国の規則でも家賃は収入の5%以下とさだめられている。それがこんどはさらに無料になっていくのである。

新綱領によれば、後半の二〇年間に、市電、バス、トロリーバス、地下鉄、水道、ガス、暖房（スチーム、熱湯など）が無料になっていく。さらには理髪、クリーニング、風呂、郵便、電話などもしだいに無料になっていくようになる。

医療はいまでもほとんどが無料であるが、さらにこの枠をひろげ、病人のサナトリウム利用や医薬品もぜんぶ無料にしていく。

工場や官庁、建設場、団地には公共食堂をつくり、みんながここで食事をとれるようになる。……しかも工場や官庁、農場の食堂では、昼食を無料でサービスすることになっている。……小、中学校ではインテルナートとよばれる一種の寄宿学校制度がひろくとりいれられ、朝昼の二回タダで給食し、放課後も無料でいろいろな援助をうけ（勉強、スポーツなど）、制服や教科書も無料であたえられる。……

ソ連はこうして、『必要に応じて受けとる』という共産主義の大原則を、しだいに実施する段階にやがて突入しようとしている。マルクスとエンゲルスが、『空想から科学に』した社会主義（共産主義）が、いまや『現実』に成長転化しようとしているのである。最近の報道によれば、すでにカザクスタンのカリーニン集団農場ではむこう五年間にパン、肉、牛乳、野菜などの主要食料の無料配給制をもうけ、パンは一九六一年中に無料受けとり制に移ることになった」（前出、一二七―一二八ページ、傍点およびゴシツク体―山本）。

ささきの報告論文——『人類の夢を実現する綱領』——の中でも、榊氏は、特にこの「無料サービス」に力こぶをい



れ、わが国の善意の読者の「心情」と「票」をフルンチョフ教祖のためにかきあつめんものと涙ぐましい努力をしていたものであるが、その二カ月後に書かれたこの本格的な論文でも、さらにいちだんと「無料サービス」が力説強調されている。つまり、このような「再三再四の力説強調」という事実によって、榊氏の頭の中には、資本主義国での「無料」と社会主義国での「無料」とのあいだの根本的差異についてのこれっぽっちの観念も存在していないという客観的事実が、この上もなく明確に実証されているのである。ところで、これら両者の本質的ながいがいすこしも知らないということは、要するに、資本主義と社会主義との本質的ながいが全然わかっていないことである。資本主義と社会主義との本質的差異、両者の「関連」がわけわからず、万事俗物的判断で事をすましているところにこそ、フルンチョフ教祖のお先棒をかつぐ猥劣的盲従分子が必然的に発生する根拠があるのである。

(5) 榊氏の涙ぐましい努力にもかかわらず、この「小、中学校」についての「フルンチョフ目論見書」の受け売りは、不幸にして逆効果しか生まないしるものである。「朝昼の二回タダで給食」ということは、「夕食は有料」ということである。「小、中学校の寄宿舎で夕食がちゃんとその代金をとられる」とは、なんとおどろくべき「共産主義社会」であろうか！「放課後、勉強、スポーツなどで、無料の援助をうける」などという文句は、そのこと自体、「共産主義社会」はおろか、「社会主義社会」にも達していない、低い、過渡期社会を示すだけのものである。「放課後の勉強」について、金を払うような「社会主義」があるだろうか！また、「放課後の運動」のための用品について生徒がいちいちその代金を払ってやっているような「社会主義」があるだろうか！こんなことは、「進んだ資本主義国」においてさえ、部分的には「飴」として一実施されているのである。「制服や教科書を無料で生徒に配布する」ことなどは、いまでは、「進んだ資本主義国」||「福祉国家」での「合い言葉」とさえなっている。

三

(七) フルンチヨフ式「共産主義社会」観念と「共産主義道徳」論の献身的支持とけんめいの宣伝

「マルクス・レーニン主義にしたがえば、共産主義社会では『必要に応じて受けとる』だけの豊富な物資とともに、労働が生活の最高の要求になるような条件が必要である。連日八時間も九時間もはたらかされている状態のもとでは、労働は苦痛でこそあれ、たのしみではない。……………」

労働時間の短縮とらんで年間有給休暇もふえ、コルホーズ員にも有給休暇制をひろめていく。げんざいでもソ連の勤労者は毎年二〇日から四〇日程度の有給休暇をたのしんでいるが、これがもっと増えるわけである。しかも前述のように毎日の勤労時間が短くなるのであるから、ソ連勤労者の時間当りの収入はおそろしく多いものになる。

ソ連の科学者の資料によると、ちかいつ将来にはソ連の労働時間は週休二日で、一日三十四時間になるだろうといわれている。そこまではいかなくとも、右にのべられたような状況下では、誰でもが『毎日の仕事がつたのしい、もつとほたらきたい』というようになるだろう。これが自然のなりゆきである。なかにはときどきなまけたい気分にかられる者がいるかもしれないが、こういふ人間も周囲がしつかりしておれば『自分を省りみる』ほかはなくなる。この点とも関連して新綱領は『共産主義社会では人間ははたらかすにはおれなくなる。その人の意識そのものも、世論もかれがはたらかないことを承知しないようになる。能力に応じた労働は、社会の全成員の習性、第一番目の切実な欲求となる』とのべている。もちろん、この場合、共産主義的教育（あらゆる労働の名譽、労働への尊敬、他人の犠牲の上に寄食しない、一人は万人のために万人は一人のためにという基本観念の確立）が大きな役割をはたすことはいうまでもない。新綱領は『共産主義者は搾取者の階級的道德をしりぞけ、古い世界のゆがめられた利己的な思想と習慣に反対し、はたらく人類ぜんたいの利益をあらわす最も公正で崇高な道德、つまり共産主義的道德を』發揚していくとのべている（前出、一二八—一二九ページ、傍点およびゴシック体—山本）。

みられるように、『わが国のマルクス・レーニン主義者』榊氏は、『マルクス・レーニン主義にしたがえば』と言って、『共産主義社会では、『必要に応じて受けとる』だけの豊富な物資とともに、労働が生活の最高の要求になるような条件が必要であ

る」と述べている。これは、右の引用文の中の「共産主義社会では人間ははたらかずにはおれなくなる。……能力に応じた労働は、社会の全成員の習性、第一番目の切実な欲求となる」という、「フルシチョフ新綱領」の文句をうのみにして忠実にくりかえしただけのものであるが、しかし、こういう「共産主義社会」についてのフルシチョフ式観念は、いったい眞のマルクス・レーニン主義にたたくそつたものといえるだろうか？ 「新綱領」は、「共産主義社会では人間ははたらかずにはおれなくなる」と述べている。それならば、共産主義社会より一段低い社会、社会主義社会では、いったい、どうなっているのか？ ここでは、まだ「人間ははたらかずにはおれなくなる」までにはならず、「なるべくはたらかないで――すべて『無料で』――生活したい」、「新しい資本家、企業家」として他人の労働を搾取して儲けたい」とおもう人間が、相当多数いるし、またいてもよい、というのであるか？ 「はたらかないで暮したい、他人の労働を搾取して儲けたい」という連中が相当多数いるような社会が、いったい、社会主義社会といえるだろうか？ ところが、そういうのが社会主義社会だという、「新綱領」のおどろくべき俗物的観念をば、わが榊氏はさらに限度なく卑俗化して、「共産主義社会になっても、なかにときどきなまけたい気分にかられる者がいるかもしれない」などと「もっともらしい」説明を加えているのである。「ときどきなまけたい気分にかられる者がいるような、共産主義社会」！ これまで「マルクス・レーニン主義者」をもって自任する似而非マルクス・レーニン主義者は数えきれないほどあったが、「共産主義社会」について、これほどひどい俗悪化と歪曲をあえてした人間があつたらうか？

共産主義社会において、「能力に応じた労働」が「社会の全成員の習性、第一番目の切実な欲求となる」という「新綱領」の主張は、まったくの誤りである。それは、共産主義社会ではじまることではけつしてない。まさに社会主義社会においてすでにそうなっているものであつて、そうでなければ、それはとうてい社会主義社会の実をそなえたものとはい

えない。榊氏のいう「なかにときどきなまけたい気分からられる者がいる」ような社会は、社会主義社会どころか、まだそこまですぐに到達しえない低い過渡期の社会でしかなく、文字どおり「資本主義社会の残りかす」がまだ強力に残っていることを示しているものである。「フルシチョフ新綱領」が徹頭徹尾、人間を物欲第一主義の動物としてとらえる俗物的見地に終始しているのとまったく同様に、榊氏もまた同じ俗物的見地をしっかりと守って、社会主義社会および共産主義社会において決定的な意義をもつ人間の問題、すなわち、社会主義的人間および共産主義的人間のあり方については、ほんのこれっぽっちも考えようとはしていない。大切な人間の問題がその俗物的視野から脱げ落ちていくために、「フルシチョフ新綱領」とその忠実なたいこもち榊氏は、たんなる「労働」ばかりを問題にして、これを共産主義的人間労働力の担い手のあり方として正しくとらえることができず、しかも、そのたんなる「労働」でさえ、これを人間にとっての「負担」としてとらえる俗物的考え方でしかこれをみることができず、そのために「能力に応じた労働」が「負担」から転じて「切実な要求」になるという点ばかり強調し、「資本主義社会の残りかす」をいっばいもった人間どもを共産主義社会の中にまでもちこんで、あれこれ、「周囲」(?)の効果や「教育」の効果などを並べたてるという始末になっているのである。

(6) 榊氏は、「労働が生活の最高の要求になる」などという、御自身の「りっぱな」言葉の意味がわけわからず、すぐそのつぎには、「連日八時間も九時間もはたらかされている状態のもとでは、労働は苦痛である」と力説している、だが、考えてもみるがいい、「労働が生活の最高の要求」であるならば、たとえ、「八時間、九時間」であろうと、どうして「苦痛」になるのか?! 榊氏は、ここで、「はたらかされている」という言葉を挿入して、「八時間、九時間」という時間数を、「はたらかされ、搾取されている」という被搾取状態とすりかえるという、見えすいたベテンをつかっているのである。資本家の下で「はたらかされている」状態では、たとえ、労働時間がいちじるしく短縮されて五時間、六時間になつていようと、その労働日は必

然的に剰余労働時間をつねにふくみ、しかも、その剰余労働時間は相対的にますます増大しているはずであり、「労働の強度」はいちだんと強められていて、つねに「労働は苦痛でこそあれ、けつしたのしみではない」のだ。これに反して、資本家・地主のいない社会、労働者・農民など勤労人民大衆のみから成る社会主義社会では、「八時間であろうと九時間であろうと」つねに「労働は生活の最高の要求」となっており、すこしも苦痛ではない。そして、それこそが、真の社会主義的人間のあり方を示すものなのだ。自国以外に数億の被抑圧・被搾取人民大衆が帝国主義者どもの残酷なくびきのもとに呻吟しているときには、資本家・地主どもを「掃して社会主義社会をりっぱに築きあげた社会主義的人民大衆は、誰から「はたらかされる」でもなく、自発的に、よろこんで、しかも「八時間、九時間」はおろか、場合によっては「十時間も十二時間も」労働できるし、また労働することによって、かれら被抑圧人民大衆の解放のためにつくさなければならぬし、またりっぱにつくすものである。ここにこそ、真の共産主義的人間像があるのだ。榊氏は、右にみたように、「ちかい将来、ソ連の労働時間は週休二日で、一日三―四時間になるだろう」という「ソ連の科学者の資料」なるものを得々としてひけらかしているが、数億の勤労人民が帝国主義者どもの飽くなき収奪、殺戮のもとに呻吟しているときに、「週休二日、一日三―四時間の労働」で「ありあまる物資と福祉を享有できる共産主義社会」に自分たちだけ一刻も早く到達しようと考えるのは、なんとという唾棄すべき利己主義、物欲第一主義の「かたまり」であろうか！フルシチョフらが『偉大な創意』を書いて「共産主義土曜労働」をこの上もなく高く評価したレーニンの精神などすっかり忘れはてふみにじっている、裏切り者であることは、疑いをいれる余地があるだろうか！また、「週休二日、一日三―四時間」をうのみにして得意になってこれをふれまわっている榊氏の「品性」が、なんと申し分のないか！こもち、反レーニンの俗物根性の典型をあらわしていることであろうか！

ここで、榊氏自身の「基本的観点」、つまりフルシチョフ式俗物修正主義の見地を示すものとして注目されるのは、「共産主義的な教育」についての榊氏の「自主独立的」説明である。榊氏は、「共産主義的な教育」に注釈を加えて、それは、「あらゆる労働の名誉、労働への尊敬、他人の犠牲の上に寄食しない、一人は万人のために万人のためにという基本観点の確立」であるという。ここに並べられた四つの「観点」のひとつでも、よく見ていただきたい。まず、榊氏は「あらゆる労働という。この「あらゆる」という修飾語ひとつによって、榊氏が、資本主義社会の「労働」のあり方を

正しい批判はいかにあるべきか

もっぱら念頭におき、それと同じ事態が共産主義社会にも当然あると考へてゐることが、明瞭に示されてゐる。資本主義社会では、ありとあらゆる種類・等級の労働——複雑労働と簡単労働、頭脳労働と肉体労働、「高尚な労働」と「下賤な労働」等々——があり、簡単・肉体労働や「下賤な労働」は、一般に俗物どもによつて、「卑しいもの」、「不名誉なもの」として輕蔑されてゐる。そこで、こうした簡単・肉体労働や「下賤な労働」をも「名誉」と考へ、「尊敬」するように教育することこそが「共産主義的な教育」の「基本」であると、榊氏は主張するわけである。これは、榊氏自身が、フルシチョフと同じ物欲第一主義の立場にたつてゐること、共産主義社会になつてもいぜんとして——資本主義社会と同じように！——簡単・肉体労働や「下賤な労働」等々、種々様々の等級の労働があるのだという考へ方にとりつかれてゐることを示すものであり、氏のきつだつた俗物的「品性」のこよなき一例証である。榊氏の俗物的期待に反して、共産主義社会では、種々様々の等級の労働も、頭脳労働、肉体労働、「高尚な労働」、「下賤な労働」も、存在しえない。すべての成員が全面的に発達した「精神的能力と肉体的能力」を身につけた人間になつてゐる共産主義社会では、同じ全面的に発達した人間労働力の支出としての労働があるだけであつて、資本主義社会でのような種類・等級などの区別はいっさいおこりえない。榊氏の註釈のなかでことに噴飯ものは、「他人の犠牲の上に寄食しない」という言葉である。「他人の犠牲の上に寄食しない」などということは、すでに社会主義社会でりっぱに實現してゐる。また、それが完全に實現してゐるのでなければ、社会主義社会などといへたものではない。それよりもずっと低い過渡段階の社会であるにすぎない。

榊氏が、「フルシチョフ新綱領」への忠実なたいこもちよろしく、得意然としてつけ加えた注釈の中の三つの言葉——「あらゆる労働の名誉、労働への尊敬、他人の犠牲の上に寄食しない」——は、資本主義社会での顕著な事実——「不名誉

とされる労働」、「軽蔑される労働」、「他人の犠牲の上への寄食」——にたいして、これらの事実がすべて完全に克服されるようにすることが「共産主義的な教育」の狙いだということを明示せんがためのものであった。だが、榊氏にはまことにお気の毒なことに、右の三つの言葉は、共産主義社会とはどういうものか、それは社会主義社会とどうちがうかという初歩的、根本的問題について、榊氏自身がほんのこれっぽっちもわかっていない、ということを示すだけの役割しかもっていないのである。なぜというに、右の三つの言葉は、そのどれをとってみても、すでに資本主義から社会主義への過渡段階において十分克服されつくすべきものを示しているのであって、これら三つの「資本主義の残りかす」の完全な克服という「基本的観点の確立」が実現されたときに、そのときのみはじめて、その社会は社会主義社会——共産主義社会ではない！——であるということが出来るからである。要するに、榊氏は、資本主義から社会主義への過渡期と社会主義社会における基本的課題のいくつかをもってきて、これが「共産主義的な教育」の基本などと、もっともらしく吹聴しているだけなのである。

さらに榊氏のあげた最後の「基本観点」——「一人は万人のために万人は一人のために」——をとってみても、そこには、榊氏自身の俗物的観念の根深さとフルシチョフ主義への絶対的盲従の不動性とがはっきり示されている。「フルシチョフ新綱領」は、いっさいに優先して、ソ連一国だけいち早く共産主義社会を建設し、ソ連人民が「あふれでるような物資」と「かゆいところに手のとどくような福祉」とを享受することをもっぱら目指して、そのためにのみつくりだされたものである。ここでの「万人」は、いうまでもなく「ソ連人民全体」であって、そこには他の諸国の被抑圧・被搾取人民大衆はひとりもふくまれていない。つまり、「一人は万人のために」というのは「ソ連人民各人は、同じソ連人民全体のために」ということ、つとめていえば「各人はすべて自分たちのために」ということである。これはまた、な

んという陋劣な、物欲第一主義の利己的「観点」であらうか！ 榊氏は、「新綱領が、『共産主義者は搾取者の階級の道徳をしりぞけ、古い世界のゆがめられた利己的な思想と習慣に反対し、はたらく人類全体の利益をあらわす最も公正で崇高な道徳、つまり共産主義的道徳を』発揚していくとのべている」と力説して、この「フルシチョフ新綱領」がマルクス・レーニン主義に正しくそったものであり、ここに「真の共産主義的道徳」が示されているのだと懸命に宣伝しているが、いったい、自分たちだけ、ソ連一國だけいち早く共産主義社会に成り上るために優先させるといふ「基本的観点」のどこに、マルクス・レーニン主義のひとかけらでも残っているといえるのか？ 「共産主義者が搾取者の階級の道徳をしりぞけ」などという口説は、むしろ、ソ連国内に——たとえば「新しい資本家」、「企業家」のように——「搾取者の階級の道徳をしりぞけ」ない輩が実在していることをうかがわせるものであって、こっけいである。なぜならば、「搾取者の階級の道徳をしりぞけ」ることが完了したところにはじめて社会主義社会が在るからであり、また「しりぞけ」が完了しないところには、資本主義的分子の残存する過渡期社会が在るにすぎないからである。「古い世界のゆがめられた利己的な思想と習慣に反対し」というのも、右と同様、逆効果しかもちえない「うたい文句」である。ことに、教祖フルシチョフが自国共産主義建設最優先主義の「計画」の中でもっとも主要な「テコ」として極力推しているものがまさに「物質的関心の原則」という、まぎれもない「古い世界のゆがめられた利己的な思想と習慣」の「のこりかす」そのものであることを考えると、この「うたい文句」の**だばらぶり**は、いっそう目ざましいものがあるといわなければならぬ。数億の被抑圧・被搾取人民大衆の革命運動をおさえつけ、元凶アメリカ帝国主義と「たがいに信頼し、相互に相補って」までしていち早く自国だけ「物資のあふれでるような」共産主義に成り上ろうという、骨の髄からの利己主義・物欲第一主義の見地が、なんと、「はたらく人類全体の利益をあらわす最も公正で崇高な道徳」を示すものであるとは！ こ



のおどろくべきフルシチョフの徹底した利己主義・物欲第一主義の「基本観点」が、実に、「わが国のマルクス・レーニン主義者」榊氏の眼には、まことにすばらしいマルクス・レーニン主義的観点として映り、榊氏は、この「基本観点」の宣伝に血道をあげているのである！

#### 四

### (八) フルシチョフ式「社会主義的民主主義」の熱烈な支持とけんめいの宣伝

「右にみてきたような物質的・文化的・精神的(9)国民生活のたかまりとならんで、国家統治と社会生活のうえでも大きな発展が予定されている。とくに大きいのは、社会主義的民主主義のいっそうの発揚である。

たとえば、勤労者のみずからの国家統治形態である各級ソビエトの代議員構成は、選挙のたびごとに三分の一以上更新することになった。党機関のばあいも原則として連続三回以上おなじ指導的ポストにつけないようにする。こんどの大会での役員改選でも、三分の一更新制は実行されている。こうした措置によって、より多くの勤労者が国家統治のしごととにどんどん参加していけるようになる。

しかも各地方の問題は、なるべくその土地のソビエトが自主的に最終的に解決するようになる一方、重要な国家的問題(法案)は全人民討議にかけられる。……

国家機関へのこうした大衆の広範な関与とならんで、大衆団体への権限移譲もはばひろくおこなわれるようになる。たとえば、労働組合や青年共産同盟などが立法措置をやる権限をもったり、『同志裁判』をやったり、教育事業をやったり、人民パトロールをおこなったりというぐあいである。こうした社会主義的民主主義の発展と大衆意識のたかまりにしたがって、国家機関の構成員そのものにも変化がおこり、専門的に国家機関にはたらく職員はしだいにへらされていく。つまり、勤労者が余暇を利用して(10)これまでの国家機関の仕事をやるようになり、職業としての国家機関職員はなくなっていくわけである。じぶんたちの社会を、自分たちの共同の努力で管理していくのであるから、この世にこれ以上の自由・民主主義はない。フルシチョフ第一書記は大会の報

告で『われわれの思想の敵は資本主義を「自由世界」として際限もなくわめきたて、あらゆる手段を動員してわれわれの社会主義的民主主義を中傷しようとしている。だが、地球上のもっとも輝かしい民主主義である社会主義的民主主義の真実をかくすことはできない』とき、ぱり指摘している」(前出、二二九—三〇ページ、ゴシック体、傍点および(?)——山本)。

榊氏が得々としてかつぎまわっているフルシチョフ式「社会主義的民主主義」とは、どんなものかといえは、ぎつとぎのとおりである。

- ①「各級ソビエト代議員が、選挙のたびごとに三分の一以上更新される」。
  - ②「党機関において連続三回以上同じ指導的ポストにつけないようにする」。
  - ③「各地方の問題は、なるべくその土地のソビエトが自主的に最終的に解決する」。
  - ④「重要な国家的問題(法案)は全人民討議にかけられる」。
  - ⑤「各級ソビエト代議員や国家機関のはたらき手は、定期的に活動報告をおこなない、下からのげんかくな点検をうける」。
  - ⑥「労働組合や青年共産同盟などが立法措置をやる権限をもち、『同志裁判』をやり、教育事業をやり、人民ペトロールをおこなう」。
  - ⑦「専門的に国家機関にはたらく職員がしだいになくなっていく、勤労者が余暇を利用して国家機関の仕事をする」。
- ここに並べられたのは、「社会主義的民主主義の発揚」のいちばん「よいところ」全部だが、いつたい、これららは、こ共産主義社会の基礎が建設されるときにはじめて実現されるような、「大事業」であるだらうか？残念ながら、ここれらの「実例」は、そのどれをとつても、共産主義社会よりもずつと以前に、社会主義社会ができあがるよりもずつと以前に、つまり、資本主義から社会主義への過渡期においてすでに十分に実現されていなければならないものである。①や②をとつてみたまえ。こういう「ソビエト代議員」や「党機関」についての「三分の一以上更新」とか「三回連続禁止」などという「形式的原則」は、ブルジョア的民主共和国でも実行できるようなものである。③や④、⑤など

は、むしろブルジョアの民主共和国でさかんに看板にしているものである。ところで、この「社会主義的民主主義」の「実例」のなかで、とくに興味をひくのは、⑥、⑦である。「労働組合や青年共産同盟」が「立法措置をやる権限をもつ」とか「同志裁判をやる」とかするそうである。「組合や同盟」が「立法措置や同志裁判をやる」ことが、なぜ「民主主義的」なのか？ 国家機関による「立法措置や正式裁判」では、なぜ「民主主義的でない」というのか？ こういう局部的団体による「立法措置や同志裁判」というものは、本来法律や裁判が「全人民にたいして平等に適用されるべきものだ」という、「民主主義の基本」と相容れないものであることが、フルシチョフとその亜流柳氏にはわからないのだからか？ ことにこっけいなのは、「人民パトロールをおこなう」という「社会主義的民主主義」のうたい文句である。すでにりっぱに社会主義建設を完了してこれから共産主義社会建設に着手しようという「すばらしい」国で、いったい、なんのために「人民パトロールをおこなう」のか？ また、噴飯ものは、⑦の「勤労者が余暇を利用してこれまでの国家機関の仕事をする」というくだりである。社会主義の「国家機関の仕事」のなかで、もっとも重要な地位をしめるのは「計算と統制」であるが、この複雑・高度な「全国的規模での計算と統制」が、なんと、「勤労者の余暇」を利用するだけで簡単に片づけられるのだそうである！ では、この「勤労者」は、その「余暇」でない「本業」のときには、いったい、どういう「本格的」仕事をやっているというのか？ その「余暇」で「全国的規模での計算と統制」を簡単に片づけるとは、またなんと驚嘆すべき**万能的「勤労者」**であろうか！

#### (九) フルシチョフの「プロレタリアート独裁不要」論の献身的支持とけんめいの宣伝

「ソ連はすでにプロレタリアート独裁によって制圧すべき階級敵は存在しない。すべてが勤労者である。換言すれば、勤労者がじぶんでじぶんを『独裁の対象』とすることはできないのである。ここに、勤労者じしんで国家秩序を維持し、やがては社会的自治

新しい批判はいかにあるべきか

五八

に移行していける社会的根拠がある。……………

ソ連で社会主義社会が樹立されたとき、すでにそこには搾取階級を制圧する機能は国内的には不必要になっていた。なぜなら、社会主義革命の徹底化によって階級敵は根絶されたからである。にもかかわらず、国家死滅の国内的前提は完成しなかった。国家死滅の前提には都市と農村との差異の排除、頭脳労働と肉体労働との差異の根絶、したがって社会各層の統一化、労働・消費にたいする国家管理の必要の消滅などが不可欠であった。同時に、共産主義の建設が帝国主義陣営の存在という状況のもとですすめられなければならないことも考慮しなければならない。

共産主義の高段階に達すれば、国家死滅の国内的前提の形成は完了する。しかし、共産主義の高段階でも、帝国主義諸国の陣営が存在し、侵略の危険が完全に除去されていないならば、国家の死滅は不可能である。国を守るためには軍隊、保安機関といった国家の重要指標のいくつかがものは保持されなければならない。それは原則的(?)マルクス・レーニン主義者が(修正主義者)とちがって(?)しかとわきまをえておかなければならない重要命題である(前出、一三〇—一三一ページ、ゴシツク体、傍点および?)—山本)。

みられるように、榊氏は、「ソ連では階級敵は根絶された。階級対立は一切なくなり、全人民は同じ勤労者になった。国内ではプロレタリアート独裁は不要になった。国家が残るのは、帝国主義陣営が在るからだ」という、フルシチョフの「プロレタリアート独裁不要」論を全面的に支持し、これをうのみにしてくりかえし宣伝につとめている。

榊氏の宣伝文句の中で注目されるのは、「共産主義の高段階」というくだりである。「高段階」では「国家死滅の国内的前提の形成は完了する」という。だから、「共産主義の低段階」では当然、それは「未完了」であって、「都市と農村の差異、頭脳労働と肉体労働の差異、社会各層の対立」が現存し、全人民は同じ「勤労者」として「統一」されるまでになっていないわけである。なんと、おどろくべき「共産主義社会」であろうか！ところで、われわれの耳には、榊氏の景気の良い宣伝文句——「勤労者が余暇を利用してこれまでの国家機関の仕事をするようになる。専門的に国家機関の仕事をする者はな

くなつていく」がまだ残っている。これは、もちろん、「共産主義の低段階」のことである。それゆえ、榊氏の(八)と(九)の主張をあわせると、つぎのようにチグハグな「共産主義の低段階」が出来あがることになる。——つまり、ここでは、まだ「全人民が『勤労者』として『統一』されるまでになつてい」ないのに、「都市と農村との差異、頭脳労働と肉体労働の差異」が現存して労働者・農民はまだ「一面的に発達した労働力の担い手」であることを免れない状態であるにもかかわらず、労働者・農民の勤労者は早くも「全面的に発達した労働力の担い手」として、しかもその余暇だけつかつて、てもなく国家機関の仕事をつづけてしまふのだ、と。こうしたタワ言を並べて教祖フルシチョフへの献身的帰依を表明する榊氏は、まさにたいこもちよろしく、フルシチョフと自分たちをば「原則的マルクス・レーニン主義者」と名づけ、フルシチョフと自分たちは「修正主義者とちがつて」いるのだと力説強調している。現代修正主義の巨頭フルシチョフとその忠実なたいこもち榊氏が「原則的マルクス・レーニン主義者」であるとは！　こういうたいこもち以上に、真正正銘の「原則的、反マルクス・レーニン主義者」が、またとあるであろうか！

#### (十) フルシチョフの「平和共存」論の絶対的支持と熱烈な宣伝

「明らかのように、ソ連にとっては共産主義社会への移行のためにも戦争を防止し、強固な平和の環境を得ることが必要である。したがって平和共存のレーニンの原則はいぜんとして堅持されていく。

『平和共存はソ連の対外政策の基本原則である……国内的な条件からすれば、ソ連には軍隊はいらない。けれども帝国主義からの戦争の危険がいぜんとして存在し、全面完全軍縮が実現されていない以上、ソ連共産党は祖国をおかそうとするどんな敵もだんこ粉碎できる水準に防衛力をたもち、戦闘体制をととのえておかなければならない』(新綱領)。

ソ連のこの立場は、平和のためにたたかう世界中の進歩勢力の立場と完全に一致しているばかりか、帝国主義者のたくらむ熱核戦争の脅威からのがれようとする人類の願望とも合致する」(前出、一三一ページ、ゴシツク体―山本)。

正しい批判はいかにあるべきか

教祖フルシチョフさえ、その恥しらずな「ソ連共産主義社会建設最優先主義」をむきだしにだすことをはばかって、「ソ連共産主義社会建設は、ソ連の国際的責務だ」などというまやかしをつかっていたのに、忠実無比な弟子、榊氏は、はっきりと「ソ連がいちはやく共産主義社会に到達するために、革命戦争もおさえねばならぬ、万事平和でなければならぬ」とフルシチョフの「本心」を表明し、おまけに、このフルシチョフ式「平和共存」は、「レーニンの原則」だと、太鼓判までおしている。「人類を破滅させる第三次大戦か、全面的平和か、第三の道はない」という、例のフルシチョフのペテン論法のお先棒をかついで、榊氏は、現代修正主義の巨頭フルシチョフの「ソ連共産主義社会建設最優先主義」の「立場」こそが「世界中の進歩勢力の立場と完全一致している」し、「人類的願望とも合致する」のだと、けんめいに宣伝してまわっているのである！

(十一) 「フルシチョフ新綱領こそは創造的マルクス・レーニン主義のかがやかしい模範である」という、断固たる主張と熱烈な讃辞

「科学的共産主義の理論のしめした共産主義社会が十月革命をやりとげたソ連邦においても、すでに目前に(?!?)つくられようとしている。ソ連邦共産党新綱領の二〇年の展望は、以上みてきたように、たいへん明快であり、卒直であり、それはソ連人民だけにでなく、われわれ資本主義世界の勤労者にくれどもつきぬ(?!?)確信と勇気をあたえてくれる。

同時にわれわれは、この壮大な共産主義の建設を指導しているのが、創造的なマルクス・レーニン主義とその党であることをしっかりと理解しておかなければならない。この壮大な共産主義への歩みは、社会改良主義や修正主義(?!?)にたいする事実による痛打(?!?)である。

『まる四四年まえ、一九一七年の革命期に、わが国の目前にはどんな道をえらぶか、さしせまった民族的破局からロシアをどう救うかという問題がもっともするどい形で提起された。そのとき、メンシェビキのある指導者は、国の運命に責任をもてるような政党は存在しないとのべた。まさにそのとき、一九一七年のあらしの日々に、プロレタリア革命の指導者レーニンの感動的なこと

ばが大胆に、ほこらかに全世界にひびきわたった。『そのような党が現にある！』と』（フルシチョフ第一書記の大会報告）。

まさにその党によって偉大な実践の綱領が採択された。いまわが国には、四四年まえのメンシエビキと同じような気分で、ソ連共産党綱領にたいして『批判』や『意見』をのべ、壮大な展望にケチをつけようとする高踏的な修正主義者(?)や社会民主主義者がいる。だが、歴史と現実とに照らしてみると、かれらの姿のなんとあわれなことがか！

共産党の言行が背離したことは一度もない。ソ連人民はこの党の指導のもとに、壮大な前進をつづけている、その目前の偉大な勝利にむかって」（前出、一三一ページ、ゴシツク体、傍点および(?)——山本）。

ここにかかげたのは、「フルシチョフ新綱領」を絶賛し、これにたいする献身的支持を表明すべく発表された榊氏の力作大論文『共産主義の壮大な展望』の最後のしめくりとしておかれた、『マルクス・レーニン主義に導かれて』と題する節の全文である。われわれは、榊氏がとくに「わが国のマルクス・レーニン主義者」と自称し、「日本共産党の理論的指導者」をもって自任しているという事情を考慮して、この結びの節で力説強調しているところを、つぎに簡条書きにして挙げておくことにする。読者諸君は、どうかここで榊氏の力説強調している言葉をとくと銘記しておいていただきたい。これは、「いつでもあとから妥当に是正する」という豹変的「品性」にもっとも富んだ榊氏が、のちに「諸事情」におされて、そのすぐれた「品性」をいかなく發揮して全く正反対のことを力説強調するようになるはずなので、そのさい対比・検討するためとくに緊要なのである。

- 一 「ソ連邦では共産主義社会がもうすぐ目前につくりだされようとしている」。
- 二 「フルシチョフ路線は創造的なマルクス・レーニン主義であり、フルシチョフの指導する党は、マルクス・レーニン主義の党である」。

三 「フルシチョフ新綱領は、偉大な実践の綱領であり、その展望は、たいへん明快であり、卒直である」。

四 「フルシチョフ路線は、社会改良主義や修正主義にたいする事実による痛打である」。

五 「フルシチョフ新綱領は、われわれ資本主義社会の勤労者にくめどもつきぬ確信と勇気をあたえてくれる」。

正しい批判はいかにあるべきか

正しい批判はいかにあるべきか

六一

六 「フルシチヨフ新綱領を絶讀しないでこれに『批判』や『意見』をのべる修正主義者や社会民主主義者の姿は、なんとあわれなことか」。

七 「ソ連人民は、フルシチヨフの指導する共産党とフルシチヨフ路線のおかげで、壮大な前進をつづけ、目前の偉大な勝利に迫っている」。

ごらんのように、「フルシチヨフ新綱領」、フルシチヨフ路線およびフルシチヨフ党にたいする献身的支持と懸命の賞讃を断固として表明したこれらの文句の「超弩級ぶり」にはおどろかされるが、それにもまして、この「結び」の中で断然光っているのは、「共産党の言行が背離したことは一度もない」という、榊氏の「名言」である。榊君よ、なんとよきことをおっしゃるではないか。「いつでもあとから妥当に是正する」という榊氏の「品性」を考慮して、われわれは、氏の「名言」をば、「時間的間隔」をおくことなく、いまここで、その発言当時にそのままてはめてみよう。さすれば、氏の「名言」がまことにすばらしい「実践的」意義をもっていることが、たちどころにわかるであろう。

フルシチヨフの指導権の確立、フルシチヨフ路線の明確化は一九五六年第二〇回大会においておこなわれ、「フルシチヨフ新綱領」は一九六一年第二二回大会で決定され、榊氏は、フルシチヨフ路線、フルシチヨフ党、「フルシチヨフ新綱領」について、一九六二年二月に、それらを「創造的なマルクス・レーニン主義」、「マルクス・レーニン主義党」だと極力主張している。それゆえ、この榊氏らの「言」にたいしては、当然、同じ「品性」の「日共指導層」による、「行」が、「一致」していなければならない。つまり、榊氏と同じ「品性」の「日共指導層」は、すくなくとも一九五六年から一九六二年まで、フルシチヨフによって改ざんされ歪曲された似而非マルクス・レーニン主義をば真のマルクス・レーニン主義と考へ、かれの改ざん、歪曲をば「創造的發展」と思いこんでいたものであり、また、この考へにしたがって、同じく「マルクス・レーニン主義の『創造的發展』」＝「改ざん・歪曲」を実行し、その「創造的適用」



と称する「日本共産党綱領」をば——完全に「言行一致」して——フルシチョフ修正主義路線を引きうつしてつくりあげたものだという事実が、「明快かつ卒直に」あかるみに出てくるのである。そしてたんに「日共綱領」のみならず、すくなくとも一九五六年から六二年までの「日共指導層」の「行」動全部は、フルシチョフ主義、「フルシチョフ新綱領」にべったりくっついて——盲従して——終始一貫フルシチョフ路線をそっくりそのまま忠実に守ってきたものだ、ということもまったくうたがう余地がない。こういう、まことに大切な歴史的事実を「明快かつ卒直に」すっきり明るみに出してくれるとは、榊氏の「名言」の実効の、なんとすばらしいことか！

さて、これまで事実を検討してきたところによって、榊氏はじめ「日共指導層」が現代修正主義、とくにフルシチョフ修正主義とどのようにたたかってきたかということは、明白になった。榊氏は、「現代修正主義にたいして、先駆的な闘争をおこなってきた」などと書きたてているが、それは全くのペテンであって、事実あったのはフルシチョフ修正主義の献身的支持・絶対的盲従ばかりである。フルシチョフ路線、「フルシチョフ新綱領」を「創造的なマルクス・レーニン主義」などと力説・宣伝してまわっていた手合が、あとで「形勢悪し」とみるやたちまち「いつでもあとから妥当に是正する」という例の「品性」を發揮して、「フルシチョフ修正主義と先駆的にたたかってきたのだ」と書き立てている！これほどひどい、人民を愚弄した恥し、ら、ずな大うそつき、ペテン師を、われわれは想像できるだろうか！

だが、榊氏らのフルシチョフ修正主義にたいする「たたかい」を事実によってあとづけるといふ、われわれの仕事はまだ完了したわけではない。われわれは、さらに一步をすすめて、一九六二年までの「べったり尻つき」||完全盲従という「たたかい」が、それ以後「事情の変化」におされてやむなくどう変ったか、つまり、例の「いつでもあとから妥当に是正する」という独自の「品性」がどんなに發揮されたかということ、同じく事実によってあとづ

正しい批判はいかにあるべきか

六四

けてみなければならぬ。

(7) 一九五六年第二〇回大会から一九六二年まで「日共指導層」がどんなにフルシチョフとフルシチョフ路線に「べったり尻つき」であったかということは、その「理論的代表者」をもって自任する榊氏の論説によって十分裏書きされているが、なお、その完全盲従がどんなにひどい、徹底したものであったかを示すために、二、三の実例を拾いあげておこう。

まず、村田陽一氏は、榊氏の報告論文よりも一歩早く——「先駆的に」——、一九六一年十月の「前衛」(第一八八号)に、『ソ連邦共産党新綱領草案について』という題名の論文を載せているが、その内容は、榊氏の二論文と完全に同じであって、フルシチョフ路線を熱烈に支持し、「フルシチョフ新綱領」を献身的に絶賛しているものである。その中では例によって、フルシチョフ式「平和共存」論、フルシチョフ式「帝国主義弱化」論、フルシチョフ式「平和移行」論、フルシチョフ式「物質的刺戟」論、「全人民国家」論、フルシチョフ式「非資本主義的發展の道」論、「民族民主国家」論が、讃辞をまじえて並べてられているが、その中のきかせど、ころをつぎに引用しておこう。

「今回の新綱領草案も、ソ連邦共産党の前二回の綱領にくらべておとらない、大きな国際的意義をもっている。この草案は、右にのべたような共産主義への移行の実行計画以外、前二回の綱領の内容を完全にひきついでおり、また十月革命後の四〇年間における全世界の革命運動と共産主義運動のゆたかな経験、ソ連邦と、ヨーロッパおよびアジアの社会主義諸国における社会主義建設の経験を総括し、普遍化して(?)いる。ソ連邦共産党第二〇回大会の歴史的な(?)決議、一九五七年のモスクワにおける共産党労働者党代表者会議の宣言、一九六〇年のモスクワにおける八一九カ国共産党労働者党代表者会議の声明その他の最近の共産主義運動の基本文献の内容は、すべてここに集大成(?)されて、今日の国際情勢と共産主義運動の戦術について、体系的な叙述(?)にまとめられている。こうしてこの綱領は、マルクス・レーニン主義理論の今日までの到達点(?)を表示するものとなっている。綱領草案は、現代におけるマルクス・レーニン主義のもっとも主要な基本文献(?)であり、現代の『共産党宣言』(?)とよんでも不当ではないであろう。去る第八回党大会で新しい党綱領を決定したわが党の黨員も、この『世界綱領』(?)をあわせて根本的に(?)学習し、その成果によってわが党綱領の理解を肉づけ、ふかめ、広い展望をもって、革命の仕事に邁進することが、なによりも必要だと考えられる」(九二ページ、ゴシック体、傍点および(?)——山本)。

片や「現代の『共産党宣言』・『世界綱領』たる「フルシチョフ新綱領」と、片やこれとび、ったり吻合する、「日本共産党綱

領」！なんと、村田氏が推奨してやまない「基本文献」第二〇回大会『フルシチョフ報告』の基礎の上にはじめて「創造的に」生みだされえた、世紀的な修正主義的「双生児」であることか！

不破哲三・上田耕一郎両氏は、「前衛」第一九六号（一九六二年四月）に発表した批判論文、『佐藤理論』の思想的系譜の中で、事のついでに、「佐藤氏は、モスクワ声明とソ連共産党新綱領の間に（矛盾）を発見したり……」（七一ページ）と述べている。つまり、不破・上田両氏は、「フルシチョフ新綱領」がモスクワ声明に完全に合致したものだということも議論の余地のないほど明白だといっているわけである。後段でもふれるが、「フルシチョフ新綱領」の中にマルクス・レーニン主義の恥しらずな改ざん、裏切りを見ることができないで、これを無条件的に支持・礼讃する者は、文字どおり完全盲従分子である。もっとも、完全盲従分子であっても、フルシチョフ失脚後になって別の音をあげることがすこしも妨げにならないのである。

さらに、西沢優氏は、同じ「前衛」第一九六号に『春日庄次郎徒党の転落の系譜——東京都を中心として』——という論文を載せ、その中でつぎのように述べている。——「かれらは、画期的な六全協決議（一九五五年七月）にもとづくわが党の政治上・組織上の路線転換の意義、および、ソ連共産党二〇回大会（五六年二月）における世界共産主義運動のあたらしい発展の内容をまったく理解できなかったばかりでなく……」（八〇ページ、傍点―山本）。フルシチョフ教祖に盲従する徒党どもの目には、『フルシチョフ報告』の世界共産主義運動にたいする画期的裏切りも「あたらしい発展」と映らざるをえない。これによると、「日共修正主義集団の転落の系譜」は、「一億総ざんげ式免罪」会議六全協あたりからはじまっているようである。

## 五

柳氏ら「日共指導層」の面々が、一九六二年当時まで、フルシチョフ教祖およびフルシチョフ路線の献身的信奉とその精力的礼讃・弘布に血道をあげている最中に、日本のそと、国際共産主義運動の戦線では、第二〇回大会『フルシチョフ報告』にはじまるフルシチョフ修正主義と真のマルクス・レーニン主義とのあいだの真剣なたたかいが展開されつつあった。フルシチョフらによるマルクス・レーニン主義の世紀的な改ざん、裏切りをたいして、その革命的

正しい批判はいかにあるべきか

原則を守り発展させるために精力的に奮闘していたのは、実に中国共産党指導部であったのである。われわれはフルシチョフらによる改ざん、裏切りの進展と、これにたいする中国共産党指導部の批判・闘争の展開について、その経過を簡単にあとづけておこう。

一九五六年二月、ソ連共産党第二〇回大会<sup>(8)</sup>、『フルシチョフ報告』のうちの「スターリン批判」、「平和的移行」論、「ユーゴ礼讃」論にたいして、中共中央の批判、——『プロレタリアート独裁の歴史的経験について』（四月）、『再びプロレタリアート独裁の歴史的経験について』（十二月）。

(8) 中共中央の最初の批判論文『ソ連共産党指導部とわれわれの意見の相違の由来と発展』（一九六三年九月、「一評」）は、その冒頭で、「当面の国際共産主義運動の意見の相違、中ソ両党の意見の相違は、一連の重大な原則的な問題にかかわる意見の相違である」（ゴシツク体および傍点―山本）として事柄の重大性を指摘しており、その第一節の中で、「具体的にいうと、この意見の相違は一九五六年のソ連共産党第二〇回大会からはじまったものである。ソ連共産党第二〇回大会は、ソ連共産党の指導部が修正主義の道をあゆみはじめた第一歩である。ソ連共産党第二〇回大会からこんちまで、ソ連共産党指導部の修正主義路線は、発生、形成、発展、そして体系化の過程をへてきた」と述べている。フルシチョフ路線礼讃に血道をあげていた「日共指導層」も、一九六三年ごろようやく「中ソ論争」について頬っかむりではすませないことをささるようになるが、しかし、一九六四年四月まで、事柄の重大性はさっぱりわけわからず、ただ「真の団結」の必要ばかりうたっている始末であった。一九六五年十月に榊氏の書いた著書『現代修正主義とはなにか』の中には、右の中共中央の『「一評」』の説明を無断借用して、「五三年のスターリン死後、とりわけ五六年の二〇回大会以後、フルシチョフらによる現代修正主義の思想と内外路線は明瞭に形づくられつつあったのであり」（九六ページ）などと並べているが、この「明瞭に形づくられつつあったフルシチョフ修正主義の思想と内外路線」にたいする献身的支持と懸命の宣伝に、なんと一九六二年まで、憂身をやつしていたのが、実に榊氏らの「日共指導層」であったのである。右の榊氏の文章などは、剽窃と「いつでもあとから妥当に是正する」という二つの「品性」の組合せのほんの一例にすぎない。

一九五七年十一月、モスクワ会議、「宣言」。ソ連共産党中央の宣言草案にたいする中共中央の修正草案、前者の改正のための論争。<sup>(9)</sup> 中共中央『平和移行の問題にかんする意見の要綱』。

(9) 「中国共産党代表団と他の兄弟党代表団の共同努力によって会議が最後に採択した宣言は、資本主義から社会主義への移行の問題で、ソ連共産党指導部が最初に提出した草案とくらべ、二つの重要な改正がなされている。第一は、平和移行の可能性を指摘すると同時に、非平和的移行の道をも指摘しており、さらに「レーニン主義が教えているように、また歴史の経験が証明しているように、支配階級はみずからすすんで権力をゆづりわたすものではない」ということを強調している。第二は、『議会で安定した多数』をかちとることに言及すると同時に、『議会外の広はん大衆闘争をくりひろげて、反動勢力の抵抗を粉碎し、社会主義革命を平和のうちに実現するために必要な条件をととのえること』を強調していることである。

以上のような改正がなされたとはいえ、資本主義から社会主義への移行の問題についての宣言の表現にたいしては、われわれはやはり不満であった。ただ、ソ連共産党第二〇回大会の定式とつじつまをあわせることができるようにという希望をソ連共産党指導部が一再ならずだしていることを考慮し、われわれもついに譲歩したのである」(『評』)。

こういう重大な論争がおこなわれたことは当時の「日共指導層」もよく知っていたはずだが、それにもかかわらず三年余りたつて「日共指導層」は、「二〇回大会フルシチョフ報告は完全なマルクス・レーニン主義である」(袴田氏)と書きたて、『フルシチョフ報告』の中のいちばん問題となった個所「棚ボタ式戦術」をそっくりそのまま借用して「日共綱領」をつくりあげている。これによつても、「日共指導層」が一九六二年までの六、七年ものあいだ、フルシチョフ主義にどれだけ帰依・盲従していたかは明瞭であるし、また、一九六〇年「モスクワ声明」採択にさいして、「わが党は、フルシチョフ修正主義と闘争した。八〇以上の修正案をだして奮闘した」という袴田の「ごりっばな」主張が、実は真ッ赤なウソでありベテンであるということも明白となるのである。

一九五九年六月、ソ連政府は「国防新技術についての中ソ協定」を一方的に破棄。九月、中印辺境事件にさいし、ソ連はインド反動派支持。キャンプ・デイビッド会談。フルシチョフによる「キャンプ・デイビッド精神」吹聴、「平和共存」・「平和移行」の大宣伝展開。

正しい批判はいかにあるべきか

一九六〇年四月、中共中央、論文『レーニン主義万才』発表。六月、ブカレスト会議。ソ連共産党指導部は反中国カンパニアを展開。これに反対するアルバニア労働党にたいするソ連共産党指導部の攻撃。中共代表団声明発表。七月、ソ連政府は、中国派遣ソ連専門家総引上げ、数百の協定と契約を一方的に破棄。十一月、八一カ国共産党・労働者党代表者会議、「モスクワ声明」<sup>(10)</sup>。

(10) 「十月、モスクワで開かれた起草委員会で、ソ連共産党指導部は自己の起草した声明草案をむりやり採択させようとはかったが、この草案には、ソ連共産党指導部の一連のあやまった観点がふくまれていた。中国共産党や、他の一部の兄弟党の代表団が原則をかたくまもって闘争したため、起草委員会は、はげしい討論をへて、ソ連共産党のだした声明草案に多くの重要な原則的な改正を加えた」(『一評』、傍点―山本)。

「ソ連共産党指導部がかれらの誤った論点を削除することに同意し、兄弟党の正しい意見をうけいれたあと、中国共産党代表団や他のいちぶの兄弟党代表団も、いくらか譲歩したということにも、もちろん、ふれなければならぬ。たとえば、われわれは、ソ連共産党第二〇回大会の問題、資本主義から社会主義への移行の形態の問題については、いずれもちがった意見をもっている。われわれが声明のなかに、一九五七年の宣言のこの二つの問題についての文字をそのまま書きいれることに同意したのは、ソ連共産党や一部の兄弟党の必要を考慮してのことである。だが、当時、われわれは、ソ連共産党第二〇回大会についての定式を大目に見るのは今度かぎりで、今後はけっして大目に見ないむね、ソ連共産党指導部につたえた。以上の事実からわかるように、一九六〇年のモスクワ、会議の全過程は国際共産主義運動の二つの路線の闘争でつらぬかれてゐる」(『一評』、傍点―山本)。

中国共産党とともに「原則をかたく守って闘争した」「一部の兄弟党の代表団」のなかには、教祖フルシチョフの忠実な弟子ども、棚ボタ式戦術の信奉者どもの集団である「日共指導層」の代表団はもとよりはいりようはない。献身的な弟子どもが、教祖のために教祖の側に立って「たたかった」ことは、たやすく推察されるところである。

一九六一年十月、ソ連共産党第二二回大会、「フルシチョフ新綱領」<sup>(11)</sup>採択、アルバニア労働党指導部を公然と攻撃。中共指導部、第二二回大会の誤りおよびソ連共産党指導部の誤りを批判。<sup>(12)</sup><sup>(13)</sup>

(11) 「ソ連共産党第二回大会は、ソ連共産党指導部がマルクス・レーニン主義に反対し、社会主義陣営と国際共産主義運動を分裂させる一つの新しい頂点であった。これは、ソ連共産党指導部がソ連共産党第二回大会からしだいに発展させてきたかれらじんの修正主義が、完全な体系をととのえたことを示す里程碑であった」(『一評』、傍点―山本)。

第二回大会に出席してフルシチョフに懸念の拍手をおくり、帰国するやこの大会でのフルシチョフ報告と「新綱領」を熱烈に賞めたたえる大論文を書きまくっていた当の榊氏が、三年後にはたちまち豹変して、その著「現代修正主義とはなにか」の中で、教祖をにわかに「フルシチョフら」と呼び捨てにし、「第二回大会では、五六年の第二回大会当時からしだいに発展してきたフルシチョフらの修正主義思想が、ひとつの体系化をとげつつあることが明確化された」(一一〇ページ)などと、むかしは考えてもみなかったようなことを得々と書き立てているが、この文句が右に示した中共中央の『一評』の中の傍点個所の下劣な盗用であることは誰の目にも明確である。『一評』では、右につづいて「この大会で、ソ連共産党指導部はアルバニア労働党にたいして大がかりな公然たる攻撃をおこした。……この大会でソ連共産党指導部がしかしたもう一つの大きな事柄は……再び集中的にスターリン反対をおこなったことである。」と述べているが、このくだりは、同じく榊氏によって無断盗用されて「周知のように(?!)、この大会はいわゆる(?!)スターリン批判とアルバニア攻撃が再度大がかりにやられた大会であり(一一〇ページ、?)―山本)というしたり顔の文句につくりあげられているのである。

(12) 「すこしでもまともにもソ連共産党の綱領とフルシチョフの報告を検討してみるなら、ソ連共産党指導部の提起しているものが、マルクス・レーニン主義の基本的原理に根本的にそむき、宣言と声明の革命的原则に根本的にそむく徹頭徹尾の修正主義綱領であることは容易にわかる」(『一評』、傍点―山本)。だが、フルシチョフに血道をあげている「わが国のマルクス・レーニン主義者」榊氏は、これを「創造的なマルクス・レーニン主義」だと懸命に宣伝してまわっていたのである！

(13) 「中国共産党はソ連共産党第二回大会の誤りにだんこ反対した。この大会に招かれて出席した中国共産党代表団の団長周恩来同志はその挨拶のなかで、わが党の立場をのべ、その後フルシチョフその他のソ連共産党の指導者との会談でも、ソ連共産党指導部の誤りを卒直に批判した。

中国共産党との会談にさいし、フルシチョフは中国共産党代表団の批判と勧告を全面的に拒否し、さらには中国共産党内の反党分子を支持することを公然と表明させた。フルシチョフは、ソ連共産党第二回大会ののち、かれらが『スターリンと異なった道』を歩みはじめたとき、つまり修正主義の道を歩みはじめたときには、まだ兄弟党の支持が必要であった、と露骨正しい批判はいかにあるべきか

正しい批判はいかにあるべきか

七〇

に表明した。かれは、『当時、中国共産党の発言はわれわれにとってひじょうに大きな意義をもっていた』、『だが、いまはちがう』、『いまでは、われわれはうまくいっている』、『われわれは自分の道を歩むのだ』といった。

フルシチョフのこれらの言葉は、ソ連共産党指導部がすでに修正主義と分裂主義の道を歩みつつける決意をしたことを示している。中国共産党が再三にわたって同志的な忠告をおこなったにもかかわらず、かれらは全く心にとめず、なんら反省の色も見せなかった」(『一評』)。

例によって「豹変」と「剽窃」の名人、榊氏は前記著書の中で、こここのくだりをそっくりそのまま頂戴して、さももつともらしく、「このときフルシチョフは、はつきり『われわれは自分の道を歩む』と宣言したのであるが、その後の歴史の経過はこの『自分の道』がいかなるものであるかをいっそう明らかにしていく」(一一〇ページ)などと書きたてている。

このフルシチョフの「自分の道」は、中共代表団の指摘する「マルクス・レーニン主義の正しい道」に対してこそいわれたものである。フルシチョフ教祖にべったり尻つきの榊氏の「道」に対しては「自分の道」などというものはそもそもありやうがない。剽窃はかならず明るみに出るものであるし、またそれ自身、おのずと馬脚をあらわすものなのである。

一九六二年、ソ連共産党指導部、アルバニアとの外交を断絶、中国共産党を攻撃、中国新疆地方で大規模な転覆活動をおこなう。ソ連政府、アメリカとの核拡散防止協定につき中国に通知、米ソの核兵器独占・核威嚇にたいし、中国政府がくりかえし抗議。ソ連共産党指導部、ケネディと反動同盟、キューバ「国際査察」の受けいれ、インド反動派と結託して中国攻撃、インド反動派への軍事援助、チトー一味と結託、その名譽回復をはかる。十一月以降、ソ連共産党指導部は国際的範囲で中国共産党その他のマルクス・レーニン主義政党にたいする攻撃を展開。「ソ連の共産党の指揮のもとに、ブルガリア、ハンガリー、チェコスロバキア、イタリア、ドイツ民主共和国の五つの兄弟党の党大会が中国反対の大公演の舞台に変わり、四〇余の兄弟党が決議や声明、文章を発表して、中国共産党と他のマルクス・レーニン主義政党を攻撃した」(『一評』、傍点―山本)。これらの攻撃にたいし、中国共産党は七篇の論文を発表して



反駁(一九六二年十二月より一九六三年三月まで)、ただしソ連共産党指導部を公然と名指しては批判せず。

(14) そのうちの五篇をあげれば、つぎのとおり、——『全世界のプロレタリアは団結し、共同の敵に反対しよう!』、『トリアチ同志とわれわれとのちがひ』、『意見の相違はどこからくるか(トレーズおよびその他の同志たちに答える)』、『再びトリアチ同志とわれわれとの意見の相違について』、『アメリカ共産党の声明を評す』。

一九六三年三月、ソ連共産党中央の中共中央あて書簡(中ソ両党会談提案)<sup>(15)</sup>。六月、中共中央の返書、『国際共産主義運動の総路線についての提案』。七月、中ソ両党会談の最中に、ソ連共産党中央は『ソ連各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡』を発表して、中共を攻撃<sup>(16)</sup>。八月、ソ連共産党指導部、米英両帝国主義国と部分的核実験停止条約を締結、その後さらに、インド反動派およびチトー一味と連合、反中国カンパニア展開。

(15) 中共中央の側からの批判を拒否して逆にフルシチョフ路線を擁護し中共指導部を攻撃しているこの書簡のなかには、つぎのような文章まで見出される。——「ユーゴスラビアについては、われわれは、その客観的な経済条件と政治条件についての分析と評価にもとづいて、ユーゴスラビアは社会主義国であると考えており、それとの関係では、われわれは、ユーゴスラビア連邦人民共和国を社会主義共同体にちかづけるよう努力したいと思ひます。このあからさまなユーゴ礼讃、チトー一味との結託の表明が、その二年半前にソ連共産党指導部も加わって決定・発表した「モスクワ声明」の中のつぎの主張を真つ向うからふみにじるものであることは、明白である。

「各国共産党は現代修正主義者の『理論』の集中的なあらわれであり、国際的日和見主義の一変種であるユーゴスラビアの日和見主義を一致して非難した。マルクス・レーニン主義を裏切り、それを時代おくれのものといっているユーゴスラビア共産主義者同盟の幹部たちは、一九五七年の『宣言』に反、レーニン主義的な修正主義的綱領をもって対抗した。かれらは、ユーゴスラビア共産主義者同盟を国際共産主義運動全体に対抗させ、自国を社会主義陣営から切り離してアメリカその他の帝国主義者のいわゆる『援助』に依存させ、それによってユーゴスラビア人民の英雄的な闘争でえられた革命的成果を失う危険をつくりだした。ユーゴスラビアの修正主義者は、社会主義陣営と国際共産主義運動にたいして破壊工作をおこなっている。かれらはブロック不参加政策という口実にかくれて、すべての平和を愛する勢力と諸国家の団結を破る活動をくりひろげている。

正しい批判はいかにあるべきか

正しい批判はいかにあるべきか

ユ、ゴ、ス、ラ、ビ、ア、修、正、主、義、者、の、指、導、者、を、今、後、と、も、暴、露、し、共、産、主、義、運、動、と、労、働、運、動、を、ユ、ゴ、ス、ラ、ビ、ア、修、正、主、義、者、の、反、レ、ニ、ン、主、義、的、思、想、か、ら、守、る、こ、と、は、依、然、と、し、て、マ、ル、ク、ス、・、レ、ー、ニ、ン、主、義、党、の、欠、く、こ、と、の、で、き、な、い、課、題、で、あ、る、(ゴソック体および傍点—山本)。

(16) 「学生新聞」をつかって抜打的に誹謗と中傷、ペテンとはったりの攻撃論文を全国にばらまいた「わが国のマルクス・レーニン主義者」榊氏が猷身的に師事しかつぎまわっている教祖にふさわしく、フルシチョフらのソ連共産党指導部は、中ソ会談のさなかに、全く抜打ち的に、あくどい誹謗と中傷、ペテンとはったりの中共攻撃論文を、党機関をつかって『ソ連各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡』と称して、全国にばらまいたものである。中共指導部は、このあくどい攻撃論文の反レーニン主義の本質を暴露し、マルクス・レーニン主義の正しい立場を宣明するために、これにたいして「ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す」という副題のもとにつきあげる九篇の批判論文を発表したが、これによってはじめて、フルシチョフ修正主義はその根底から徹底的に粉碎・打倒されるにいたった。フルシチョフ礼讃、フルシチョフ修正主義路線の支持・宣伝に血道をあげつづけていた榊氏ら「日共指導層」が——その足許に火がついたためによぎなく——豹変してにわかに「フルシチョフ礼讃」攻撃、フルシチョフ修正主義路線非難に乗りかえたときに、あれこれ「理窟」を並べたる必要に迫られて、例によって「創造的」剽窃の「品性」が発揮されたが、その「たね」は、もちろん、この中共指導部の発表した九論文を除いては他にこれを見つけることもできなかったのである。

- 1、『ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展』(一九六三年九月六日、『一評』)
- 2、『スターリン問題について』(一九六三年九月十三日、『二評』)
- 3、『ユーゴスラビアは社会主義国か』(一九六三年九月二十六日、『三評』)
- 4、『新植民地主義の弁護人』(一九六三年十月二十二日、『四評』)
- 5、『戦争と平和の問題での二つの路線』(一九六三年十一月十九日、『五評』)
- 6、『根本的に対立している二つの平和共存政策』(一九六三年十二月十二日、『六評』)
- 7、『ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である』(一九六四年二月四日、『七評』)
- 8、『プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義』(一九六四年三月三十一日、『八評』)
- 9、『フルシチョフのエセ共産主義とその世界的教訓』(一九六四年七月十四日、『九評』)

では、ソ連共産党指導部と中国共産党指導部とのあいだに、「一連の重大な原則的な問題」をめぐる苛烈な論争と闘争が展開されつつあったこの時期、つまり、一九五六年第二〇回大会から一九六四年四月までの間に、「日本共産党指導層」は、どのような反応をしめしたのであろうか？

まず、一九五六年から一九六一年十月ソ連共産党第二二回大会が終るまでのあいだ、終始一貫、フルシチョフ教祖の修正主義路線に「べったり尻つき」であり、したがって、右の苛烈な論争と闘争についてひとことも発言していない、つまり、例によって例のごとき沈黙戦術がとられた。「べったり尻つき」のたいこもちのことである。もし少しでもフルシチョフ教祖に「分がある」と見たならば、教祖の肩をもってさぞかし賑やかなたいこをたたいたことであろう。だが、中共指導部の側に「分がある」と感じれば、教祖への「べったり尻つき」にとっては、「沈黙」の手しかとれない。しかし、両者の論争と闘争はまことに激烈で、いやしくも一国の「共産党指導部」を名乗る以上、いつまでも頼りかむりはまずい。そこで、両者どちらを支持するでもなく、「論争」が重大なものではないといって、もっぱら「団結」の必要を説き、同時に「日共指導層」の「独自の権威」をうたいあげるといふ、ごまかしのための論説が、当分のあいだ書きならべられることになる。その第一のものは、一九六一年十二月十九日「アカハタ主張」として発表された論説である。ときあたかも袴田氏、榊氏らの面々が「人類の夢を実現する」だの、「壮大なる展望」だのといった、フルシチョフ路線への献身的讃辞を書きまくっている最中である。いかに小才を弄しても、心中のほどはおのづとおもてに洩れざるをえない。われわれは、「べったり尻つき」がものしたこのまやかしの「お体裁」論説——『国際共産主義運動

の団結のために、二つの敵とたたかい抜くために」——の中味のほどをすこしく吟味してみよう。

この論説の書き出しは、こうである。

「ソ連邦をはじめとする社会主義陣営における共産主義と社会主義の建設は着々とすすみ、植民地・半植民地における民族解放運動はあらゆるようないきおいでひろがり、資本主義諸国における平和、独立、民主主義、社会主義をめざす人民のたたかいも不屈にすすめられている」（日共宣伝教育文化部編『国際共産主義運動と日本共産党』、三一ページ）。

ごらんのように、この論説は、冒頭に「ソ連邦をはじめとする社会主義陣営」と置き、その「ソ連邦」では「共産主義の建設が着々とすすんでいる」と述べたてている。いったい、「中ソ論争」の中心問題はなにか？ なぜ「論争」がおきたのか？ それは、フルシチョフらが「ソ連邦共産主義社会建設最優先主義」の立場からマルクス・レーニン主義の基本原則を改ざんし、国際共産主義運動に致命的打撃をあたえ、しかもソ連邦を共産主義に導くどころか、これを変質させ、資本主義復活の道を強引に推進したからである。つまり、「ソ連邦」の「指導部」は「社会主義陣営」を攪乱し、分裂をひきおこし「資本主義復活の道を着々とすすんでいる」がゆえにこそ、重大な論争がもちあがったのである。それにもかかわらず、このように、ことさら『国際共産主義運動の団結のために』と題した論説において、しかもその冒頭において、「ソ連邦」を「社会主義陣営」の「かしら」に据え、おまけに「ソ連邦で共産主義の建設が着々とすすみ」などと書き立てている「日共指導層」は、このことによって、いま問題となっている「重大な原則的な問題」の深刻な意義や重大性がさっぱりわけわからず、ひたすらフルシチョフの腰ぎんちゃくとして事態を「丸く納める」ことに懸命であるということを、自ら暴露しているのである。この冒頭の一文を読めば、これからさき何を言おうとしているかは、およそ察しがつくというものである。では、当面の問題そのものについては、どのように述べているかといえば、なんと、

つぎにかかづけるのが、その全部なのである。

「すでにしられているように、国際共産主義運動の内部にも、公然とした論争がはじまっており、それが若干の国家間の関係にも重大な影響をおよぼしている。それはわが国の民主運動(?)にたいしても影響をおよぼさないわけにはいかない。

反動勢力は、この問題を大きくとりあげて、国際共産主義運動の威信を傷つけ、ひいてはわが党にたいする攻撃にこれを利用してようとしている」(前出、三一—三二ページ、傍点および(?)—山本)。

ここでまず奇異に思われるのは、「国際共産主義運動の内部にも」というときの「も」である。この「も」がなぜおかれているかを解きあかすのは、右の文章に先きだっておかれているつぎのくだりである。

「……アメリカ帝国主義をかしらとする侵略と反動と抑圧の勢力は、ますます各国人民から孤立し、帝国主義陣営の内部矛盾は、いっそう、深まっている。……」(前出、三一ページ、ゴシック体および傍点—山本)。

つまり、「帝国主義陣営の内部」に「内部矛盾」があるが、「国産共産主義運動の内部」にも「矛盾」があり、「公然とした論争」がはじまっている、という主張である。「帝国主義陣営の内部」にも、「共産主義陣営の内部」にも、同じように敵対的「内部矛盾」がある、というわけである。まったく本質のちがった両陣営をもってきて、しかも全然質のことになった両者の「矛盾」をとらえて、両陣営とも同じように敵対的「内部矛盾」がある、敵対的「内部矛盾」があるのは当然だなどと主張するとは、なんとあきれかえった「共産党指導層」であろうか！

(16) この「内部矛盾」というもつともらしい用語が、実は毛沢東の周知の論文、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』(一九五七年)から無断借用したものだということはずぐわかる。だが、無断借用、つまり剽窃するような手合は必ず錯乱と改ざんをとまなうものであって、このばあいにもそれが明瞭に看取される。毛沢東が述べているのは「人民内部」の「矛盾」であって、「人民」の「内部矛盾」ではない。「内部矛盾」とは、ある「事物」に固有のものであって、その「内部矛盾」によってはじめてその「事物」が運動しうるのである。「帝国主義陣営」ならば問題はないが、いったい、「共産主義陣営」そ

正しい批判はいかにあるべきか

七六

のもの内部に、「帝国主義陣営」内部と同じような敵対的「内部矛盾」があるのか！ところが、あきれたことに、「わが党の野坂議長」までもが——あとで仔細にみるように、——この「内部矛盾」というまやかしい用語をつかって、「共産党同志のあいだで、内部矛盾が生じることもありうる」などという、迷演説をぶっているのである！

右の引用文の冒頭には、「すでにしろれているように」などというきまり文句がおかれている。「すでによく知られているように」な「論争」であるならば、「日共指導層」は、なぜ、その「論争」がどうして生れたか、それはどんな重大な問題をめぐっておきているのか、その問題にたいする双方の主張はどんなものであるか、それらの主張のどこが正しく、どこか誤っているかということ、そして、その問題にたいして「日共指導層」自身はどういう考え方をし、どのように解決すべきものと考えているかということ、とっくの昔によく解明しておくべきではないか。とっくの昔どころか、あとから急遽出した「お体裁」論説の中でも、そのほかのどこでも、これらのことにはいっさい触れていないのである。問題そのものの内容についてすらひとことも説明しないで、よくもまあ「よく知られているように」などと言えたものである！ 問題にたいするマルクス・レーニン主義的見解を示すことはおろか、問題の所在そのものについて最小限度必要な説明を与えるべきだという当然の義務までもすっかり忘れはてて、「日共指導層」の切実な関心は、なんと情ないことに、「この問題」によって「わが党」がどんなに攻撃されるかという点にばかり集中しているのである。論説の「一」の後半は、「わが党にたいする攻撃」のことばかり弁じたてている。問題そのものの内容を明確に説明し、問題にたいする正しいマルクス・レーニン主義的見解を的確に示すところが、「わが党にたいする攻撃」を完全かつ徹底的に封ずる唯一の道なのだ。ところが、「日共指導層」は、借り物の棚ボタ式「綱領」で場当たり式の「民主運動」しかしていないために——つまり、マルクス・レーニン主義党としての実体をそなえていない

ために、——いつ、どこから攻撃されてもぐらぐらする恐れがあることをよく自覚しているので、「事件」のおこるたびにどうしても、誰か攻撃してくるものはないかということばかりが先きに頭に來て、あれこれ可能な「攻撃」をかぞえあげたり、どんな「攻撃」にも「断固とした反撃をくわえる」などという強がりやを並べたことで「論説」をつくりあげるしまつとなるのである。これは、まさに、フルシチョフ教祖の「庇護」のもとに「権威」だけはなんとか保とうと戦々兢兢これつとめている小ブル的俗物の実体をさらけ出したものである。

つづいて「二」では、ソ連共産党第二二回大会に出席した「わが党の野坂議長」の演説が引用され、この演説に便乗して「わが党の方針」というものが並べられている。「第二二回大会への祝辞」の内容がどんなものかはすでに前節でよくみたので、ここではその「祝辞」の前にある「主張」部分——「二」の冒頭の文章——をみてみよう。

「わが党の野坂議長は、ソ連共産党第二二回大会への祝辞のなかで、ソ連邦における共産主義建設の壮大な展望を祝賀し、日本の人民とわが党のたたかひの成果にふれたのち、国際共産主義運動の団結の問題についてつぎのようにのべている」（前出、三三ページ、ゴシツク体および傍点——山本）。

「国際共産主義運動の団結の問題について」などともったいぶった書き方がしてあるが、「つぎにのべている」ことといえは、「共産主義者の不拔の団結こそ、その勝利の最大の保障であります」、「国際共産主義運動の団結をさらにいっそうつよめ、勝利にむかって前進しましょう」ということだけでおしまい、なのである。これではただ「団結が大切だ」というだけであって、どんな小ブル的俗物でも知っているし、言えることである。現に重大な問題となっているのは、「団結が大切だ」という問題」などではさらさらでない。特定の「重大な原則的問題」こそ、問題の焦点なのである。この「原則的な重大な問題」にたいして、フルシチョフ式修正主義の立場をとるときには、「フルシチョフ新綱領」を支持し、

正しい批判はいかにあるべきか

「ソ連邦共産主義社会建設の壮大な展望」を祝賀、絶賛することになる。だが、フルシチョフ修正主義こそ、国際共産主義運動の中に分裂をもたらし、「団結」を破壊し、国際共産主義運動を攪乱する最大の中心的潮流、いわばその最大の「ガシ」なのである。それゆえ、ここで「アカハタ主張」がことさら「わが党の野坂議長」が「ソ連邦における共産主義建設の壮大な展望を祝賀し」と述べているのは、まさに「語るに落ちる」の部類で、「わが党の野坂議長」が終始一貫「フルシチョフ新綱領」を賞讃し、フルシチョフ路線を支持していることをはっきりと露呈しているものである。フルシチョフ路線を支持し絶賛している者が「団結」を主張するということは、フルシチョフ修正主義を認め、これを基本として、「団結」すること、つまり、フルシチョフ教祖の采配のもとに「団結」することを主張することである。なんと、フルシチョフ路線に「べったり尻つき」の手合テアヘに似つかわしい「団結」の弁ではあるまいか！

ところが、「アカハタ主張」は、それ自身の説明の内容が右のような客観的意義をもっていることにすこしも気がつかず、なおも御叮嚀に「野坂議長」が「フルシチョフ新綱領」を絶賛している事実を得々と並べたてるのである。

「野坂議長は、帰国後の報告演説（アカハタ、十一月二十二日付）のなかでは、あらゆる面にわたってソ連邦共産党二十二回大会の成果と共産主義建設の綱領についてのべたのち、とくにつぎのようにのべている。

『それぞれ国情のちがういろいろの共産党同志のあいだで、いろいろの個々の問題について意見の相違や内部矛盾が生じ、こともありうる。このような問題は、わたしが大会へのあいさつでもはっきりいっていましたように、一九五七年のモスクワ宣言と一九六〇年のモスクワ声明によってあきらかにされた基準にしたがって事を処理し、いっそう団結をかためていくことができます。この二つの宣言と声明は、世界の共産党・労働者党の綱領的文書といつてさしつかえありません。』

野坂同志のこれらの祝辞と演説にのべられている国際共産主義運動の団結にたいするわが党の基本的態度は、国際共産主義運動の綱領的文書であるモスクワ宣言とモスクワ声明にもとづいて、社会主義陣営と国際共産主義運動の団結をあくまで擁護するといふ、わが党第八回大会の基本方針に依拠するものである」（前出、三三—三四ページ、ゴシツク体および傍点—山本）。



ごらんのように、「野坂議長」はごていねにも、「あらゆる方面にわたって」フルシチョフ教祖の司会した第二二回大会のすばらしい「成果」と「フルシチョフ新綱領」の「壮大な展望」をのべて、まずフルシチョフ路線への献身的帰依と絶対的支持を披瀝する。そして、国際共産主義運動における「重大な原則的問題」をば、なんと、「それぞれ国情のちがういろいろの共産党同志のあいだ」の些末な「いろいろの個々の問題」にすりかえ、「意見の相違や内部矛盾が生じることもありうる」などと述べたてている。つまり、「それぞれ国情がちがう」のだから「意見の相違が生ずることもあっていいのだ」というわけである。これこそ、小ブル的俗物の無能の典型的見本でなくて、なんであらうか。

「野坂議長」も「アカハタ主張」も、口を開けば、「モスクワ宣言」と「モスクワ声明」という。ソ連邦共産党指導部も中国共産党指導部も、ともに、これらの「綱領的文書」に「依拠」していながら、しかも、「重大な原則的問題」についての敵対する意見をたたかわしているのである。右の二つを「綱領的文書」と呼んでみたり、これらの「基準にしたがって事を処理し」などと体裁のよいことを並べたてて、いったい、なんのたしになるというのか。

さらにあきれたことに、「アカハタ主張」は、「国際共産主義運動の団結にたいするわが党の基本的態度」などという、全く見当ちがいの言葉をならべて、しかも、「団結をあくまで擁護する」などという「わが党の基本方針」を述べたてて得々としている。「団結をあくまで擁護する」ことなど、子供でも知っていることだ。「第八回大会」は、いうまでもなく、「日共指導層」が第二〇回大会におけるフルシチョフに絶賛の拍手をおくり、「フルシチョフ報告」に「べったり尻つき」でフルシチョフ式「棚ボタ戦術」を「創造的に」借用した当の「大会」である。それゆえ、「団結をあくまで擁護する」という「第八回大会の基本方針」とは、「フルシチョフ路線を忠実に守り、フルシチョフの指揮棒のもとに、あくまで団結を擁護する」ということである。なんと、教祖フルシチョフにとって心強い弟子の発言であることか！

「アカハタ主張」の「三」のなかにも、「無能」と「問題のすりかえ」を示す文章がいろいろと出てくる。

「一つの党のなかでも、また各兄弟党のあいだでも、意見の相違はおこりうる。一つの党のなかの矛盾は、討議をつくしたのち少数が多数にしたがうという民主集中制の原則が守られるならば、かならず内部矛盾として正しく解決される<sup>(17)</sup>。……各兄弟党間におこりうる矛盾の解決方法については、モスクワ声明は、つぎのようにのべている。『もしもいづれかの党に他の兄弟党の活動についての問題が生じた場合には、その党の指導部は、相手の党の指導部に話をもちかける。もし必要があれば会議をひらいて協議する』」(前出、三五ページ、傍点—山本)。

ごらんのように、マルクス・レーニン主義の「もつとも重大な原則的な問題」についての、レーニンの把握と反レーニンの歪曲という、決定的な敵対がすこしもわからず、これを「意見の相違はおこりうる」とか「おこりうる矛盾」などという見当ちがいのきまり文句でごまかしている。「討議をつくしたのちに少数が多数にしたがう」とか「相手の党に話をもちかける……協議する」などということをお願い、中ソ両党指導部はちつとも知らないし、そんなことは少しもしないとしても、「日共指導層」は考えているのだろうか？ 中ソ両党指導部にたいして、「民主集中制の原則」とか「話をもちかけ、協議する」などということをお説くとは、なんとという思いあがった愚か者であろうか。「重大な原則的な問題」というのは、すでに与えられているのである。これにひとつも答えずに、——また答えることもできないくせに、——いったい、なにをもつて問題に答えようとするのか。

(17) さきに注(16)でも指摘したが、「日共指導層」がこの言葉を剽窃した当の毛沢東論文では、「人民内部の矛盾」は本来敵対的なものでないからこそ「民主的な方法」により、「正しく処理し解決することができる」と述べられている。だが、中ソ両党指導部間の論争は、レーニン主義的立場と反レーニンの反革命的立場との闘争であって、「内部矛盾」どころか、まさに敵対的矛盾である。この明白な敵対的矛盾がわからず、これを「内部矛盾」と誤解し、おまけに毛沢東論文をそっくりそのまま剽窃して「正しく解決される」と混同したたわごとを並べて平然としている。剽窃と改ざんを唯一のたよりとして「重大な

原則的問題」をみごと「解決」<sup>二</sup>なくしてしまふとは、なんとすぐれた「品性」であろうか。

「アカハタ主張」の最後の「四」も、あいかわらず問題の所在をごまかし、「団結」ひとつをくりかえしのべたて、「わが党」は「マルクス・レーニン主義の原則をかたく守って、前進する」のだという、空<sup>カラ</sup>いばりの文句を並べることで終始している。そのうちから、見本として、二箇所をつぎにとりだしてみよう。

「われわれは、なによりもまず、国際共産主義運動の二つの綱領的文書のしめしている方向にもとずいて、一日もはやくこれらの問題が正しく解決されることを心から願っている。これは、わが党の全党員の気持ち(?)である。プロレタリア国際主義の精神で教育され、国際共産主義運動の団結を重視しているわが党の黨員として、これは当然のこと(?)である。

わが党は、商業新聞、雑誌、春日庄次郎一派の文書が、すでに国際的に公表されている文献にもとづいてこの問題を取りあげ、国際共産主義運動の実践のわい曲とわが党にたいする中傷に利用している今日、国際共産主義運動に責任をもっている(?)党として、黨員および党を支持している人びとが、この問題に関連して公表されている文献をいっそう包括的に研究できるような措置―関係文献の刊行など、をすすめるだろう。

黨員は、それらの文献を研究するにさいしては、プロレタリア国際主義と国際共産主義運動の団結をあくまで擁護し、モスクワ宣言とモスクワ声明、およびわが党の綱領と第八回党大会の政治方針をいっそう深く理解するといふ、理論的、実践的態<sup>マウ</sup>度(?)にはつきりみちびかれなければならない」(前出、三六ページ、ゴシツク体、傍点および(?)―山本)。

ここに述べられていることは、いったい、「国際共産主義運動に責任をもっている党」の「指導部」としての発言だろうか? とんでもない。これは、いっさいの責任を回避して「プロレタリア国際主義と国際共産主義運動の団結」という空<sup>カラ</sup>文句で事を処理しようとする小ブル的俗物の「権威的」おしゃべりにすぎない。なぜというに、

第一に、「日共指導層」は「これらの問題が正しく解決されることを願っている」という。責任ある「マルクス・レーニン主義党の指導部」なら、「重大な原則的問題」とはなにか、「正しい解決の道」はどこにあるかをはっきりと示さなければ

ばならぬ。これらの当然のことができず、「事がうまく片づくように」と「願っている」だけである！

第二に、一口に「プロレタリア国際主義と国際共産主義運動の団結」といっても、いろいろある。「優先的にソ連邦に共産主義を建設することが、自分の主要な国際的責務だ<sup>(18)</sup>」といつてフルシチョフ教祖のかかげるのも、フルシチョフ式「プロレタリア国際主義と国際共産主義運動の団結」であつて、その熱心な弟子やたいこもちが限定なしに「プロレタリア国際主義」とか「国際共産主義運動の団結」とかいう言葉を並べたてているときには、それはまさにこのフルシチョフ式のものでしかないのである。

(18) 本稿第七節の「二」(本誌第二十二巻第三号、九ページ)参照。

第三に、「商業新聞、雑誌、春日一派の文書」が「すでに国際的に公表されている文献にもとづいてこの問題をとりあげ」あれこれ論じているといつて、「アカハタ主張」は非難しているが、これなどは、まさに下司<sup>ゲメ</sup>の逆<sup>サカ</sup>うらみである。これらのマス・コミがとりあげあれこれ論じるのは、しごく当然であり、また大変結構なことである。真にその名に値する「共産党指導部」ならば、マス・コミが国際的文献を発表し勤労大衆のあいだに問題についての知識を弘めているのを利用して、「重大な原則的問題」とはなにか、その正しい解決の道はどのようなものかをはっきりと解きあかし、マス・コミその他の意識的な歪曲を徹底的に暴露して人民大衆を真に教育することができるし、またしなければならぬ。こうした当然の課題が全くわからず、またはたすこともできないで、マス・コミの論評を非難するとは、なんとというケチで、無能な「指導層」であろうか！

第四に、以上述べたような当然の課題をりっぱになしとげることなどさらさら考えず、この無責任な似而非<sup>ニクニク</sup>「指導部」は、なんと、「関係文献の刊行などをすすめるだろう」と述べたてている。「文献を刊行する」ことで「包括的な研究」や「正しい結

論と解決の道を見出す」ことができるでも思っているのか、それで「指導部」としての責務をはたしたとでも考えているのか！

第五に、「国際主義と団結を擁護すること」「宣言」と「声明」、日共綱領と第八回党大会政治方針をいっそう深く理解することと、わずかこの二つを挙げて、これが「理論的実践的態度」などと吹聴している。いったい、「理論的態度」とはどんなものか、ひとつ説明してみるがいい。また「実践的」でない「態度」というものがあつたら、あげてみるがいい。われわれにとって問題なのはつねに「実践」するさいの「態度」であるから、「実践」にかかわらない「非実践的態度」などを考えつくのは、小ブル的術学趣味でしかない。「わが党の綱領と第八回党大会の政治方針」は、さきに詳細にみたように、御存じ『二〇回大会フルシチョフ報告』を基本とした、フルシチョフ路線盲従の産物である。フルシチョフ式「国際主義を擁護し」フルシチョフ路線丸写しの「日共綱領をいっそう深く理解する」という「理論的実践的態度」にはっきりみちびかれ」たのでは、落ちゆく先はただただひとつ、「フルシチョフ路線を基本とする団結」だけである。

こうして「四」の終りに出てくるのは、またしても相変らずの手前味噌ばかりである。

「わが党は、すでに一九五五年いらい、極左冒険主義と家父長的個人指導の有害な結果を克服し、さらにトロツキズムや修正主義、教条主義など左右の日和見主義とたたかい、きびしい試練のなかでできたえられてきた。わが党は、これらのたたかきを通じてマルクス・レーニン主義の諸原則をわが国の具体的な歴史的な条件に創造的に適用した綱領をかちとり、それを中心にしてどのような時期にもまして堅く団結している。わが党は、今日、どのような事件がおころうとも、プロレタリア国際主義とマルクス・レーニン主義の原則にもとづく確固とした路線を擁護しぬくことができる党に成長している」(前出三七ページ、傍点―山本)。

「左右の日和見主義とたたかい、きびしい試練のなかでできたえられてきた」と自称する「指導層」が、なんと、最悪の日和見主義フルシチョフ修正主義とのたたかきが焦眉の急務となつてることが全然わからない！ 現にフルシチョフ

正しい批判はいかにあるべきか

八六

当面しているような問題もおきているのである。

それぞれ異なった具体的条件の下で活動していく途上で、各国共産党・労働者党やその指導部のあいだに、個々の問題で意見のちがいがあらわれてくるのは、ありうることであり、ある意味では避けられないことである」(前出、二二—二三ページ、傍点—山本)。

フルシチョフ路線に「べったり尻つき」の「日共指導層」は、フルシチョフ修正主義こそ「ソ連邦共産主義建設最優先主義」のもっとも悪質な利己的「大国主義」であることが皆目わからず、やれ「多数の独立した平等な党」だとか、やれ「それぞれ異なった具体的条件のもとで活動しているから、個々の問題で意見のちがいが出てくるのは不可避である」とか、全然見当ちがいのタワ言を並べたてているが、客観的にみれば、フルシチョフらソ連共産党指導部にとってこれほど心強い「掩護射撃」は、またとあるものではない。

そのほか、「たがいに支持しあい団結してきた全世界の共産党が、……どうして団結できない理由があるのか」(二四ページ、傍点—山本)とか、「国際共産主義運動内部の意見のちがいと不団結の問題……は、一時的なものであり、かならず解決される問題である」(二六ページ、傍点—山本)とか、およそ口から出まかせのおしゃべりを並べ、その「解決」のための適切な「処方箋」として、つぎのようなためごかしをあれこれ弁じたてている。

『宣言』や『声明』がさしめす原則に反する行為をたがいに中止して、問題のただしい解決の条件をつくること」(二七ページ、傍点およびゴシック体—山本)、「二国の党大会が機関紙誌などを通じて敵の面前で公然と論争することを中止し、さらに意見のちがいを解決する話し合いや国際会議をおこなうために、一致して努力すること」(二九ページ、傍点—山本)、「社会主義諸国の共産党・労働者党間の関係を改善すること……。そのためには、まず党のあいだの意見のちがいをただちに国家間におよぼさないようにし、民主主義国家間の関係を改善するための実際的な措置がとられること」(前出、二九ページ、傍点—山本)。

(19) この一見気の利いたせりふは、「日共指導層」が場当たり式の出まかせで大衆を釣るといふ独自の「品性」に富んでいることを実証する好見本である。その出まかせぶりをのちに自認し告白する役割を―それも、フルシチョフ教祖からむりやり与えられて―うけもつことになるのは、ほかならぬ「日共指導層」自身なのである―

(20) 「不団結」が「一時的なもの」でもなく「解決される問題」でもないことを、あとでいちばん身をもって思い知らされることになるのは、なんと、わが「日共指導層」なのである。

(21) ソ連共産党指導部だけでなく、中共指導部も、「原則に反する行為」をしているのだという主張をかかげることができるのは、フルシチョフ路線への盲従分子だけである。

(22) レーニンのように、名実かねそなわった真の「指導者」は、「敵の面前であろうと、なかるうと」、党内闘争を歓迎し、「党内闘争は党の強さのしるしであり、党は党内闘争によってこそ強くなる」と教示したものである。ところが、その完全な理論的貧困を場当たり式の引廻し主義でなんとかカバーしなければならぬ名ばかりの「指導者」とっては、いつ、どこでその理論的実践的破綻をさらけだすかもしれないので、敵の面前で論争することは絶対禁物である。「食うか食われるか」の間柄にある敵がどう出るかなどを心配したり、小ブル的俗物どもの同情票をふやすようにあれこれ心を痛めたりするのは、フルシチョフ教祖の得意の「品性」であったが、「日共指導層」がもっともよくこの「品性」をうけついでいるもののひとつであることは、これによって明白である。

(23) 「社会主義国家」をいいかえて「民主主義国家」としている点に注意されたい。この「決議」をした「日共中委総会」は、「社会主義国」を「民主主義国」とするほど、「民主主義」にぞっこん参っているが、いったい「ブルジョア民主主義国」は「民主主義国」ではないのか? 「社会主義国」は「プロレタリアートの独裁の国」、「ブルジョア民主主義国」は「ブルジョア階級の独裁の国」だというマルクス・レーニン主義の初歩的知識が全く欠けているわが榊氏は、例によって全くいわれないがかりを弄して、「山本は社会主義革命と民主主義革命とを混同している。理論的素養の完全な欠除を自己暴露している」とわめきたてたものだが、もし、いささかでも自分の言葉に責任をもつほどの人間であるならば、同じ論法で「日共中委総会」を攻撃・罵倒しなくてはなるまい。

右の「中委総会」は、さすがフルシチョフのたいこもちの集りだけあって、「無能にもとづくよぎない『洞ガ峠』の

正しい批判はいかにあるべきか

「固守」という実体を指摘される恐れのあることを本能的に感じとって、これにたいする予防線＝逃げ口上を手廻しよく張っておく<sup>(24)</sup>という、「芸の細かさ」をみせている。――

「しかし、われわれはただ団結だけを強調して、国際共産主義運動の内部の意見のちがいにあらわれている政策上・理論上、不一致の重大性、したがってこれを解決してより高い、より強固な政治的・思想的団結をかちとることの重要な意義をいささかも軽視するものではない」(前出、二七ページ、傍点―山本)。

「団結」ではなくまさに、「敵対的対立」こそ問題だということがほんのこれっぽっちもわけわからず、「団結をかちとる<sup>(?)</sup>」ことの重要な意義<sup>(?)</sup>をいささかも軽視するものではない」などと「見当ちがいの「見得」をきらずにおれない無能な小ブル的俗物! 「マルクス・レーニン主義の擁護か、改ざんか」の「決定的敵対」が「政策上・理論上の不一致」としてしかその眼に映らない斜視的<sup>(25)</sup>たいこもち!

(24) 同じ年十一月にも『国際共産主義運動の真の団結と前進のために』という論説が公表されているが、その中味はさきの二つと全く同じで、あくまでもフルシチョフ教祖の尻にくっついての「団結と前進」だけを弁じたものである。

(25) こうした斜視的<sup>(?)</sup>たいこもちがどんなに「巧みな」詭弁を弄して勤労人民をたぶらかそうしているかの一例として、「日共指導層」の一員、川端治氏の論文『ブルジョア論壇における「中ソ論争」と修正主義者の役割』(「前衛」二二〇号、一九六三年五月)の中から、きかせどころを抜粋しておめにかげよう。

「意見の不一致は勝利の途上にあるからこそ起り、アメリカ帝国主義を先頭とする世界の反動勢力をいかにして、『埋めてしまふか』が現実的課題になったからこそ起ったものに他ならない」(二四ページ、傍点―山本)。「……わが党があえて『対立』のなかに入らないことをひき出し、わが党が前衛失格であるかのようにいう。わが党が『中ソ論争』の存在を否認しているかのように説くのも彼らの共通した手法である。それはまったくのいつわりである。だが、われわれが彼らのいうような、つまり対立と分裂が事態の本質であるかのような『中ソ論争』を認めていないのだ、というのなら、われわれは昔もいまも『そのとおりだ』、と、いいきるだけのことである」(二五ページ、傍点―山本)。



「政策上・理論上の意見の一時的不一致」などではなく、「決定的対立と敵対的闘争」が生じたのは、まさに、フルシチョフ  
教祖らのために「世界反動勢力」によって「社会主義国」が現実「埋められつつある」からこそなのである。「いいきる」の  
は、毎度のこと御自由だが、一年足らずのうちにこれと全くあべこべのことを「いいきる」破目になることをおもえば、こ  
うした「はかない見舞」はむしろあわれみの情をそそる「だけのことである」!

さて、このようにして、フルシチョフ教祖の「権威のかさの下に」おさまってひたすらに「団結」と「話し合いに  
よる解決」というお題目を唱えて「時間の経過」が問題を片づけてくれることを唯一の手だてとしていた「日共指導  
層」の切なる期待にもかかわらず、歴史はなんと皮肉にも、この手だてと期待とをいっぺんにふきとばしたばかりでな  
く、さらにこの忠実無比な弟子どもをば教祖に刃向わざるをえない破目におとし入れるにいたった。その契機となっ  
たのは、一九六四年春の米ソ共同謀議による「部分核停止条約問題」の勃発である。<sup>(26)</sup>

(26) このきわめて露骨な大国主義的・反革命的「条約」案には、さすがに「べったり尻つき」の手合もいつものように追隨す  
ることはできず、——中国その他の猛烈な反対を目の前にしていたので——その批准反対を決定したが、従来フルシチョフ  
路線盲従を一貫して守ろうとする志賀氏らは、決定に反して賛成投票をし、ために除名処分をうけ、この志賀氏らをばソ連共  
産党指導部が強力に尻おしして、「日共指導層」にたいし攻撃を加えるにいたったのである。

教祖のために「和解」をこいねがい、懸命に「団結」の讃歌を唱えてきた忠実な弟子も、教祖絵本山から直接に非難・攻  
撃をうけるにいたっては、同じ讃歌をくりかえしてはおれない。とりわけ人一倍強烈な自己保存本能は、教祖に反撃  
の矛先こそむけ、罵倒の大喊声をあげることによって、これまでの教祖への献身的讃歌をもみ消してしまふことを命  
令せずにはおかない。その中でひとときわずぐれて大きい音をあげるようになるのは、もちろん、かつて教祖絶讃で最  
大の音をあげていた「指導的人物」、そして「いつでもあとから妥当に是正する」という「品性」にもっとも多くめぐま

れた代表的「哲学者兼評論家」榊利夫氏においては、ほかに絶対にはありえない。そこでつぎにわれわれは、榊氏がこれまで他のあらゆる弟子どもを圧倒してひとときわ高く奏でていた教祖絶讃の高音ホウをばいちはやくもみ消してしまつたために、どんなに倍旧の「壮大な」音ホウをあげることになるかということをし、とくと拝聴することにしよう。